

令和3・4・5年度

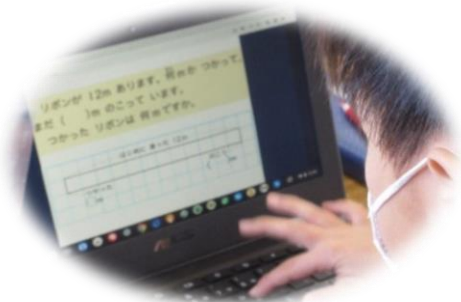
新座市教育委員会研究委嘱

研究主題

主体的・対話的で深い学びの創造

～ICTを活用した授業実践を通して～

研究紀要



新座市立新開小学校



教育長あいさつ

新座市教育委員会教育長 金子 廣志

本日ここに、令和3・4・5年度新座市教育委員会委嘱による新座市立新開小学校の研究発表会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

さて、変化が激しく予測困難な時代の中で、子供たちには、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、他者を尊重し、協働しながら豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手となることが求められています。そのような力を確実に身に付けさせるために、中央教育審議会は、目指すべき「令和の日本型学校教育」の中で、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現させる授業改善の必要性を示しています。同時に、GIGAスクール構想により学校のICT化が推し進められる中、情報化・グローバル化による社会の変化に対応できる子供たちを育成することが求められています。そういった状況において、ICTの活用が一気に推進され、授業の在り方も従来のそれから大きく変容を遂げつつあることも、忘れてはなりません。

このような中、新開小学校におかれましては、「主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～」を研究主題とし、ICTを効果的に活用して「主体的・対話的で深い学び」を確実に実現し、学力向上につながる指導の在り方について、国語科を中心に研究を推進してこられました。その結果、児童の実態や課題から、目指す児童像や研究の仮説を明確にし、「主体的・対話的で深い学び」に迫るためのアクティブ・ラーニングに視点をおいた、具体的な手立てを講じることができました。ICTの効果的な活用も、授業の変革を実現する重要な要素の一つとなったことは、言うまでもありません。本研究は、誰一人取り残されることのない「令和の日本型学校教育」の構築を実現し、新しい時代に求められる力を育むものであると確信しております。

最後になりますが、本校の研究のために熱心に御指導いただきました、十文字学園女子大学副学長 安達 一寿 様をはじめとする諸先生方に心より感謝申し上げますとともに、新開小学校 影山 葉子 校長を中心に御努力いただいた教職員、並びに研究推進に御尽力賜りました皆様に感謝申し上げ、あいさついたします。



校長あいさつ

新座市立新開小学校校長 影山 葉子

我が新開小学校では、GIGAスクール構想による一人1台端末の有効的な活用を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現について、令和3年度から新座市教育委員会の委嘱を受け、学校研究として取り組んで参りました。特に、国語科の学習

指導を軸にして、「主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～」を研究主題とし、授業改善に努めてきたところです。

研究を開始した令和3年度の時期は、ICTの積極的な活用が求められ、学校現場ではタブレット端末を目の前にして、手探りの状況でありました。本校では、このことについて様々な方法で試行錯誤を繰り返しながら、挑戦するような気持ちで取り組んで参りました。その結果、学習指導におけるタブレット端末の適切な活用を実現させ、どの授業においても、主体的、そして対話的な学びに迫ることができました。さらに、深い学びの実現を求めて、アクティブ・ラーニングについて改めて研鑽を積み、評価方法にも及んで授業実践に取り組んで参りました。実際のところ、一朝一夕に成果を得ることは難しいことでしたが、これからの未来を生き抜く子供たちに、求められている力を身に付けさせるには、今、教師は毎日の授業で「何をしたらよいのか」をじわじわと体感することができた、ということは掲げておきます。まだまだ、研究推進は必要と実感しておりますが、一つの区切りとして本日の研究発表会において、御参会の皆様にご報告し、忌憚のない御意見を頂戴できれば幸いです。

結びに、本研究を進めるにあたりまして、3年間懇切丁寧に御指導をいただきました、十文字学園女子大学副学長社会情報デザイン学部情報デザイン科教授 安達 一寿 様をはじめ、新座市教育委員会指導主事 佐久間 雄一 様 並びに 新座市立片山小学校校長 戸高 正弘 様 に深く感謝申し上げますとともに、このような貴重な研究の機会を与えていただきました新座市教育委員会教育長 金子 廣志 様をはじめとする皆様に心から御礼申し上げます、挨拶いたします。

目次

I 研究の全体構想・・・P 4

II 研究の概要・・・P 5

- 1 研究主題
- 2 主題設定の理由
- 3 研究仮説
- 4 研究組織
- 5 学力向上プラン

III 研究の内容・・・P 9

- 1 研究への姿勢
- 2 3年間の研究の積み上げ
- 3 研究1年目：基礎研究のスタート
- 4 研究2年目：研究主題に迫る授業の実践
- 5 研究3年目：研究主題に迫る授業の質の向上

IV 各部の取組・・・P 15

◇授業研究部

- 1 アクティブ・ラーニングについて
- 2 ルーブリック評価について
- 3 アクティブ・ラーニングを支える手立て

◇調査部・・・P 21

- 1 研究1年目の調査・分析・結果
- 2 研究2年目の調査・分析・結果
- 3 研究3年目の調査・分析・結果
- 4 学級力アンケート
- 5 教師の実態調査

◇環境部・・・P 37

環境整備

V 研究の成果と課題・・・P 41

- 1 成果
- 2 課題
- 3 研究のまとめ

【参考文献】

I 研究の全体構想

目指す児童像

【資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける子】

- ◎主体的…知識や技能、学習意欲を伸ばし続けようと自律的に学習している。
- ◎対話的…意見や気持ちを伝え合い、力を合わせて協働的に取り組んでいる。
- ◎深い学び…自律的な学習、自他理解など様々な学びや体験を通して学習観を更新し続けている。

研究仮説

「主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～」という研究主題に基づき、

- ①学びの基盤となる基礎知識・技能の習得（タブレットの基礎技能、Qubenaを用いた漢字・計算の復習）
- ②「思考力・判断力・表現力」を伸ばす、積極的な協働学習→対話的な活動に焦点を置いて（アクティブ・ラーニング、コミュニケーション、チームワーク、プレゼンテーション）
- ③学びの自己更新を図る児童自身による自律的な評価活動（アクティブ・ラーニングに係る自己評価シート、学級力アンケート、ルーブリック評価）

以上の3点を意識し、ICTを効果的に活用しながら組織的、計画的に行っていくことで、

【資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける子】を育てることができるのではないだろうか。

研究主題

主体的・対話的で深い学びの創造
～ICTを活用した授業実践を通して～

学校教育目標

かしこい子 心ゆたかな子 たくましい子

社会的背景

◆個別最適な学び、AIがもたらすユビキタス社会の到来、人口・気候変動・食料・エネルギー・ウイルスなどの地球環境問題、人種差別・誹謗中傷などの人権問題、経済状況からくる格差社会など、世界情勢は目まぐるしい変化を遂げている。この中で、子供たちに求められる力を以下の4点としてまとめた。

- ①「知識」と「技能」をバランスよく身に付け、深い思考活動につなげられる力
- ②学ぶことに対する「態度や価値観」を強くたくし、継続的に学びに向かおうとする力
- ③多様な環境に触れながら、社会に視野を広げ、自らの人生のビジョンを磨いていこうとする力
- ④多様性を肯定し、自分の特徴を生かした個性豊かな心を育てていく力

つまり、先行き不透明な時代を生き抜いていくためには、【生涯に渡って、他者と協働しながら主体的な学習者（もしくは働き手）として活動し、自らの能力を伸ばしていく力】が社会的背景から求められている。

Ⅱ 研究の概要

1 研究主題

主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～

2 主題設定の理由

ユビキタス社会の到来や人口減少、超高齢化社会、地球環境問題、戦争、人権問題など、日本のみならず世界中が様々な発展を遂げながらも、多くの問題に直面している。そして、ここ数年の新型コロナウイルスの影響により、今までの「当たり前」が通用しない時代へと世の中の状況が大きく変化した。さらにAIの加速により、10年後、20年後に消滅する職業が多く存在しているとも言われ、様々な物事が淘汰されつつある。そのような時代背景から、教育の世界も例外ではなく、新しい教育観に変わっていくことが求められ、「変わりゆく変わらないもの」、「不易と流行」を教師が着実に捉えながら、子供たちの教育を見据えていくことが、今までの時代よりもより一層必要とされている。

前回の学校研究において、「何のために教育を行うのか」「子供たちにどのような力を身に付けさせることが必要なのか」を、3年間を通して考えてきた。子供たちが将来、転んでも自分で立ち上がる力、勇気を奮い立たせる力を養うこと、つまり、児童の「自己指導能力の育成」を実現させることが、教育の役割であると実感したところであった。そして、その考え方を引き継ぎながら、加速する激動の時代を生き抜いていく子供たちを育成する為には、どのような教育が必要なのかを議論した結果、

①物事の知識と機器を使いこなす技能

②予測困難で未知の時代にもめげずに順応していく柔軟性と耐性

③他者と関わり受け入れながら、共存していくことへの正しい倫理・道徳観

とする3点を養っていくことが必要であり、その為には、「必要感のある協働的な学びの中で、繰り返し対話し、学習意欲の向上と学力の定着を図り続ける授業の追求」に意見がまとまった。

以上の理由から、タブレット一人1台端末を活用して、「主体的・対話的で深い学びの創造」を研究主題に掲げ、「～ICTを活用した授業実践を通して～」を副題として研究を進めていくこととした。

(1) 新開小学校の目指す児童像

◎主体的…知識や技能、学習意欲を伸ばし続けようと自律的に学習している。

◎対話的…意見や気持ちを伝え合い、力を合わせて協働的に取り組んでいる。

◎深い学び…自律的な学習、自他理解など様々な学びや体験を通して学習観を更新し続けている。

→「資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける子

(2) 新開小学校の実態

①児童の実態

- ・知識・技能の基礎学力の定着がもう一步である。
- ・「指示待ち」の傾向が強い。
- ・間違えることに抵抗を感じており、自ら考えを表現しようとする児童が特定化している。
- ・協働的な学習の経験や、協働的な学習で得られる満足感や充実感が少ない。
- ・何のために学ぶのか、将来に対するビジョン（未来像・目標など）を描けていない児童が多い。
- ・達成感や満足感、課題意識など、客観的な自己分析による自己理解の経験が少ない。

②教師の実態

- ・授業に対して「これでいいのか」「教材の解釈が合っているか」という疑念が常に存在している。
- ・児童に「知識・技能」を身に付けさせているか、不安に感じている。
- ・「思考力・判断力・表現力等」を伸ばし、自ら考えを表現しようとする児童の育成に自信がない。
- ・学び合いを適切に仕組むことが不十分で、協働的な学習が実現できていない。
- ・ICTを活用した授業実践の回数を増やし、授業力を向上させたいと思っている。

3 研究仮説

『主体的・対話的で深い学びの創造』～ICTを活用した授業実践を通して～という研究主題に基づき、

- (1) 学びの基盤となる基礎的な知識・技能の習得
 - ・タブレットの活用における基礎技能の習得
 - ・Qubenaを用いた漢字・計算の復習
- (2) 思考力・判断力・表現力を伸ばす、積極的な協働学習
 - ・アクティブ・ラーニング→プレゼンテーション→コミュニケーション＝チームワーク
- (3) 学びの自己更新を図る児童の自律的な評価活動
 - ・学級力アンケート
 - ・ルーブリック評価
 - ・振り返り

以上の3点を意識し、計画的・組織的にICTを活用しながら研究に取り組んでいくことで、

【資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける子】を育てることができるのではないだろうか。

(1) 学びの基盤となる基礎的な知識・技能の習得

週2回の基礎学力の定着の時間「はなまるタイム」を実施している。タブレット活用における、基礎知識や基礎技能の習得を図ることは基本として、低学年は従来通りドリルやドリルノートを活用して基礎学力の定着を図り、中学年から高学年までは、Qubenaによる基礎学力の定着を図った。特にQubenaに関しては、家庭学習はもちろんのこと、授業の中で必要に応じて問題を児童に配信し、取り組ませることで、「問題の把握→課題の決定→解決の見通し→自力解決→練り上げ→練習（汎用的な能力の向上）→まとめ」と、1時間で学習の定着を図る授業展開を続けている。尚、他に「音読タイム」や「ぴよんぴよんタイム（縄跳び運動）」も設けている。

(2) 思考力・判断力・表現力を伸ばす、積極的な協働学習

○アクティブ・ラーニングの学習形態導入

「主体的・対話的で深い学び」の根幹である「アクティブ・ラーニング」について、改めて学び直すことを研究の要とした。授業あるいはその他の教育活動の中で、児童の意欲を喚起し、児童の横のつながりを強固にしながら、児童全員で学びを深めていく授業展開をねらった。児童一人一人の自己有用感や達成感、非認知能力、コミュニケーション力、チームワーク、プレゼンテーション力、学力、そして教師の学級経営力など、多くのことを向上させられることを期待して、研究2年目より導入した。

(3) 学びの自己更新を図る児童の自律的な評価活動

①学級力アンケート

アクティブ・ラーニングが成立する学級作りを目指して、実態を把握する為の15の質問項目から構成されているアンケートである。学級力を向上させ、望ましい学級を構築していくために、児童自身が客観的に学級の様子を把握し、自身の学級を見つめる為の指標となる。回答結果をレーダーチャートにまとめ可視化することで、学級の課題や伸びを把握しやすくなっている。また、エクセル出力により、プロット図も作成できるため、学級全体の傾向だけでなく、学級内での児童一人一人の点在する位置を捉えることもできる。

②ルーブリック評価

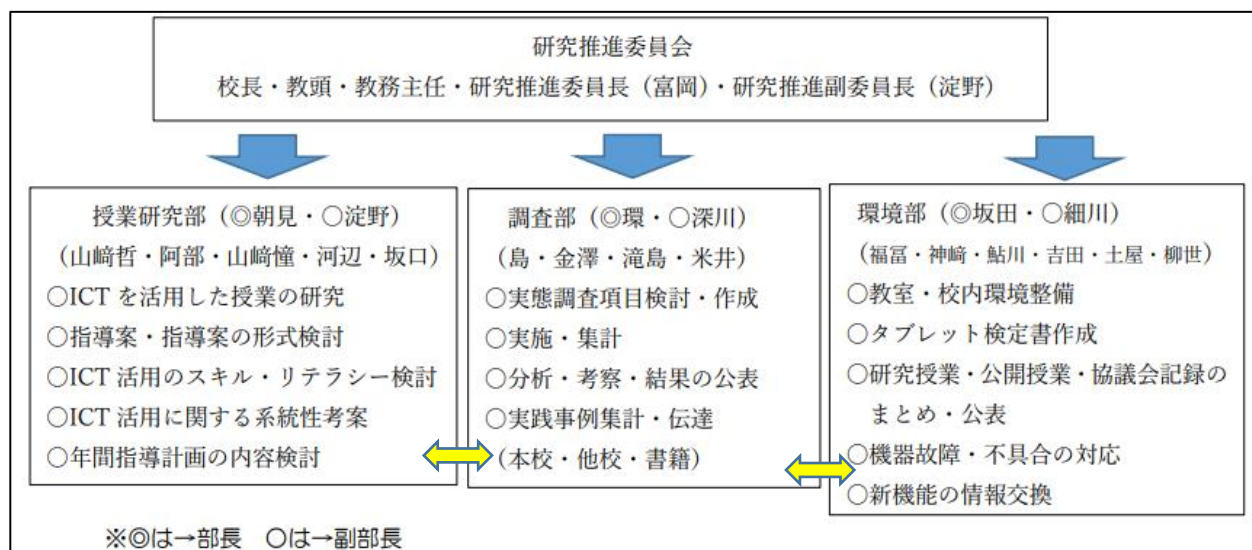
アクティブ・ラーニングは、児童が主体的・対話的に活動する場面が多い学習形態である。しかし、そのすべてを教師や児童が把握することは、大変困難なことである。そこで、ルーブリック評価を取り入れて、児童をアクティブに活動させながらも、目標に向かう方向性を明確に示し、「教師が教えたいこと、伝えたいこと」と「児童が学ぶこと、学びたいこと」に、一本の筋が通ることを目指した。つまり、教師にとっての「指導と評価の一体化」、児童にとっての「学びと評価の一体化」を、相互に図ることを意図した。

③振り返り

評価活動と共に学習を完結させるためには、振り返りが大切である。毎時間の振り返りを前提とするのではなく、単元や題材の中で学びを成立させるために、必要なタイミングで効果的に実施するようにしてきた。また、学びのすべてを評価するのではなく、「評価に生かすための振り返り」と「指導に生かすための振り返り」の2点を教師が着実に意識して、日々の授業改善に臨んだ。

さらに、「社会に開かれた教育」につながる振り返りを意識し、「①わかったこと、できるようになったこと。②わからなかったこと、できなかったこと。③友達の考えを聞いて思ったこと。④自分の考えが変わったこと。⑤自分にとって役に立ったこと。⑥生活にいかしたいこと。⑦疑問に思ったこと。⑧もっと知りたいこと。」など、主体的・対話的で深い学びの視点や実生活との繋がりを意識した振り返りの視点を児童に選ばせ、振り返りの質を向上させ、より深い学びに浸透していくことを意識した。

4 研究組織



5 学力向上プラン

令和5年度 学力向上プラン

- 日本国憲法 学習指導要領
- 教育基本法 ○学校教育法
- 第3期豊かな学びで未来を拓く埼玉教育プラン
- 埼玉県教育行政重点施策 ○指導の重点・努力点
- 新座市指導のてびき 等

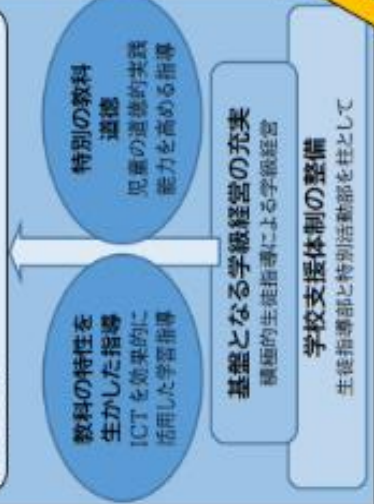
確かな学力の育成

- 基礎的・基本的な知識及び技能の習得
- 思考力・判断力・表現力の育成
- 学習に取り組む意欲・態度の向上

校内研究の推進・充実

研究の仮説

アクティブ・ラーニングを取り入れた学習形態を取り入れることで、支持的な学級風土の構築を図り、更に教師の「指導と評価の一体化」を意識した学習を進めることで、「児童の「学びと評価の一体化」につなげることができよう。



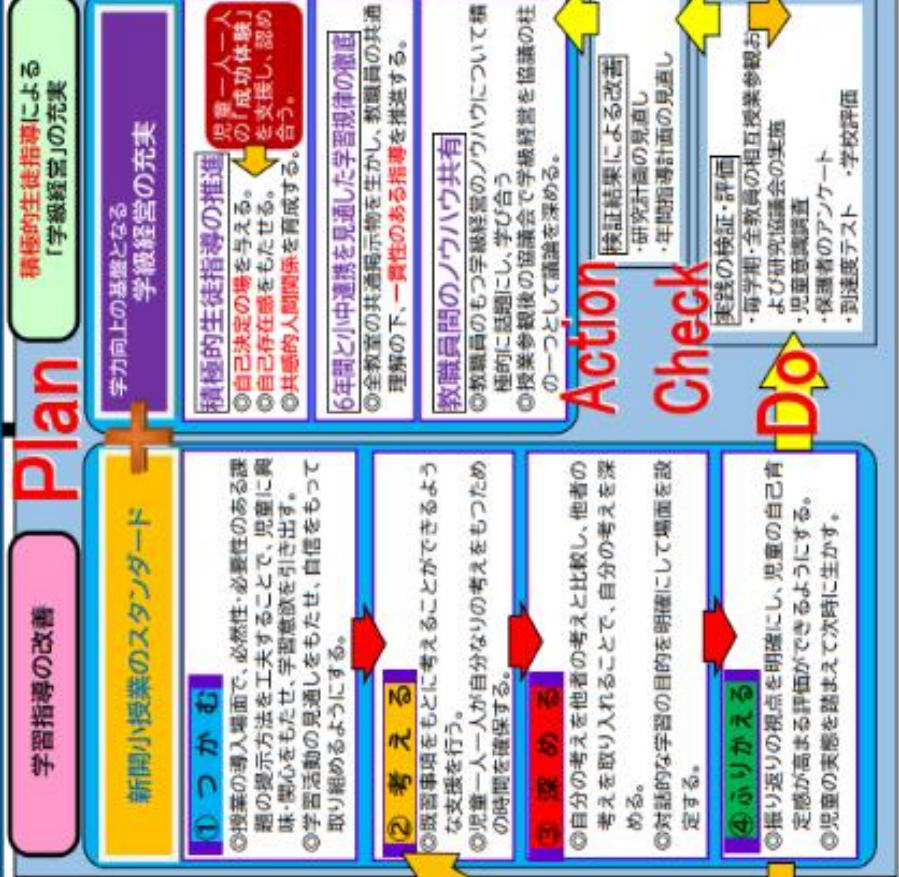
- 児童の主体性を育てる「ICT」を活用した学習指導
- 児童が学習の中でICTを活用して調べ学習を進めると、興味・関心を広げながら見方・考え方を働かせ、主体的・対話的に取り組める。
- 授業の中で、ICTを活用して協働学習を意図的に仕組んでいくことで、友達同士の間がより良好になる。
- ICTを活用することで、様々な場面で物事を多面的・多角的に捉え、自ら深い学びにつなげることができる。

学校教育目標

かしこい子 心ゆたかな子 たくましい子
キャッチフレーズ
太陽のように ひまわりのように

本校の課題
見通しをもった主体的な学習意欲の向上と積極的な対話的学習態度の育成

主体的・対話的で深い学びの創造
-ICTを活用した授業実践を通して-



新座市立新開小学校

児童の実態 保護者の願い 教師の願い

本校児童の実態

- ◇進級して学習を続けることの大切さを意識している児童が多い。
- ◆自ら課題を見つけたがり、学習のゴールまで粘り強く、計画的に取り組んでいく児童が多い。
- ◆グループ学習全体で活発に意見を交流し、学習を振り返り上げていくことに苦手意識を抱いている児童がいる。

R5 学力・学習状況調査に見られる傾向

- 6年
- 国語: 全体的に学力が伸びており、特に下位層の伸びがよい。「読みこと」の領域が苦手な児童が多い。
 - 算数: 県平均よりも学力が上回っている。上位層、下位層もよく伸びている。「数と計算」の領域が県平均よりも低く、分数、約数が苦手な傾向にある。
- 5年
- 国語: 学力は全体的に県平均よりも下回っているが、下位層の学力はよく伸びている。「情報の扱い」方、我が国の言語文化」の領域が苦手とする児童が多い。
 - 算数: 学力は全体的に県平均よりも下回っているが、上位層、下位層の学力はよく伸びている。「数と計算」の領域の正答率が低く、基礎的な知識・技能が身に付いていない児童が多い。
- 4年
- 国語: 学力は全体的に県平均よりも下回っているが、「話すこと、聞くこと、書くこと」の領域は上回っている。「漢字の音・訓」「主語・述語」といった基礎的な問題の正答率が低い。
 - 算数: 学力は全体的に県平均よりも下回っているが、「測定」の領域を得点とする児童が多い。「分数の引き算」の正答率が顕著に低い。

令和5年度 本校の課題への取組

- 1 自分の考えを深めるため必要感のある言語活動、グループ活動を意図的に設定する。
- 2 ICTを活用して、積極的な意見交流を行わせる。
- 3 読書活動や言葉の学習を充実させ、語彙を増やす。
- 4 日記や感想文など、児童が取り組みやすい「書く」活動を増やす。
- 5 「AI型ドリル教材」を活用し、基礎学習の定着に向け、個に応じた学習を推進する。
- 6 はなまるタイムを活用し、基礎学力の定着を取り組む。

Ⅲ 研究の内容

1 研究への姿勢

研究を始めるにあたり共通理解を図ったことは、次の2点である。

- ①本発表に向けての研究ではなく、教師の指導力を高め、授業や学級経営、生徒指導など、日々の教育活動に生かせる研究を前提とすること。
- ②立場に関係なく、教師一人一人の人材・リソースを生かしながら全員で取り組む研究であること。

2 3年間の研究の積み上げ

研究主題に迫る授業の質の向上（ICT活用の日常化）

- アクティブ・ラーニングの系統性、授業の質の向上
- ルーブリック評価のレベルアップ
- アクティブ・ラーニングに関する実態調査／国語に関するアンケート調査
実態調査から本校の課題を抽出し、的を絞った授業実践に挑戦
- 3年間の集大成として紀要の取りまとめ

研究3年目

研究主題に迫る授業の実践（ICTを手段として）

- アクティブ・ラーニングの授業形態の学び直し→主体性や対話的な学びの促進
- ルーブリック評価の導入→教師の視点「指導と評価の一体化」
児童の視点「学びと評価の一体化」
- アクティブ・ラーニングに関する実態調査／国語に関するアンケート調査
- 学級力アンケート調査→望ましい学級を目指す為、道標としての学級の実態の可視化
- 2年間で蓄積した研究内容の整理と研究発表へ向けての確認

研究2年目

基礎研究のスタート（ICTを目的として）

ICTの活用とは？目指す児童像は？⇒研究主題の決定

- 立場を超えた人材・リソースの発掘（チーム新開）→ICTの研修
- ICTの利用…「まずは使ってみよう！」トライ&エラー
- ICTを活用…授業実践の経験と知識・技能の蓄積
- 授業改善の糸口をつかみ、研究主題達成へ向けた手立てを模索

研究1年目

3 研究1年目 「基礎研究のスタート」(ICTを目的として)

<背景>

- ①ICTに対する児童の興味が高い。
- ②タブレット一人1台の端末によるスピーディーな調べ学習により、自らの興味関心を広げながら見方・考え方を働かせ、主体的に取り組んでいけそうだという教師の希望がある。
- ③「GIGAスクール構想」「個別最適な学び」「ICTを活用した授業」について学びたいという教師の願いがある。

<研究1年目(令和3年度)の主眼>

- ①前期: ICTの利便性や内容を知る。
- ②後期: 教科を絞らずICTを活用した授業にトライ/研究主題に迫るための手立ての模索

<1年目に意図していたこと>

- 教師の指導方法の中にICT活用という新しい選択肢を増やし、授業改善の糸口をつかむ。

(1) 授業改善へ向けたICTの活用研修

前半は、「まずはICTを使ってみよう」をテーマに、人材リソースを生かして、ICTに長けている教員や興味の高い教員による研修会を随時仕組みながら、Googleスライドやフォーム、meetやジャムボード、そしてロイロノートなど、様々なアプリの種類や内容、扱い方について学ぶ機会を設けた。トライ&エラーを繰り返しながら、授業で使えるICTの使い方を探り、より多くの教員が一定の水準で扱えることを目指した。また教員の研修と同時に、児童にもタブレットに触れさせる機会を少しずつ増やしていった。

ICTの活用を「目的」と捉えて研修を進めたことで、まずは「授業=ICTを活用しなければならない」と教員の意識改善を図ることができた。

(2) ICTを活用した授業実践の蓄積

後半は、校内の研究授業を実施すると共に、教員を小グループに分け、互いに授業を見合う公開授業も実施した。研究授業及び公開授業では特にICTを活用し、対話的な活動を取り入れた授業実践に取り組むことを約束事とした。公開授業後には、グループ毎に協議会を行い、ICTを活用した授業の効果や対話的な活動の成果と課題を話し合い、研究を進めていった。

1年目は教科を絞らずに、各々の教師が取り組みやすい教科でICTを活用したことで、若手からベテランまで、ICTに触れる機会を増やすことができたと共に、授業実践記録の蓄積と教員のICT活用の水準を引き上げることができた。

(3) 1年目の取組の成果

①ICTの利便性実感

今までの教育では難しかった、児童一人一人の考えを共有することが、瞬時に可能になった。可視化・即時性というICTの利便性を生かし、児童の課題を少しでも克服できるよう、改めて授業改善への手立ての一つとして考えられるようになった。また、オンラインを活用して、自宅で受けざるを得ない児童も授業に参加することができ、授業のハイフレックス化も実践することができた。

さらに、授業のテスト作りや資料作り、実態調査など、ICTを活用することで時短が実現し、働き方改革に繋げることもできた。

※「児童の実態調査」に関しては、P21からの調査部の紙面に記載

②対話的な活動の多様性

ICTを活用することで、「対話」の可能性が広がった。本校の研究に即した捉え方をすると、「対話」とは、友達同士での意見交流であり、コミュニケーションである。学級全体の前で「発表し合うこと」のみが対話ではなく、ノートやタブレット端末に記述した考えや意見を「見る＝読む」ことも、十分な対話になりうるという認識をもつことができた。

③現実的な課題

(ア) 児童の主体性を高め、児童同士の協働的な学びを育み、児童自らの生き方を深めていく授業への糸口がつかめていない。

(イ) 児童のタブレット活用の水準を思うように引き上げることはできなかった。教師が望んでいるICTスキルと児童が実際に扱えるICTスキルに差が存在していた。使う機会が増えれば増えるほど、学年が上がれば上がるほど、使いこなすスキルや知識は向上していったが、系統的で発達段階に見合ったICTスキルについて整備する必要が生まれてきた。

④研究主題に迫るための手立て考案

1年目の研究を振り返り、研究主題に迫るために必要なことを議論し、次のことが分かった。

1年目の児童に対するアンケート調査の結果から、

○ICTに対する意識や基礎技能の向上は、少しずつ図れている。

○タブレットを活用することで基礎学力の定着が図れたとは言い切れない。

○対話的な学習の経験不足や、全体の前で発表することに対する抵抗感が強い。

ということが分かった。さらに、教師の「1年間の振り返り」から、次のことが分かった。

○ICTを効果的に活用した授業実践が不足している。

○対話的な活動に視点を置いた学びの充実の図り方がつかめていない。

これらを整理して、2年目からは「主体的・対話的で深い学びの創造」につながる、新たな手立て「アクティブ・ラーニング」について、改めに学び直す運びとなった。

(4) 研究1年目の歩み

- | |
|---|
| <p>①デジタルシティズンシップ教育やICTを活用した授業実践に関する講義
講師 十文字学園女子大学 副学長 安達 一寿 様</p> <p>②第1回校内研究授業
第6学年1組 社会科 単元名「縄文のむらからくへ」
授業者 坂田 理恵 教諭</p> <p>③第2回校内研究授業
第4学年1組 国語科 単元名「生き物の『初耳』を友だちに伝えよう」
教材名「うなぎのなぞをおって」 授業者 佐藤 創 教諭</p> <p>④第3回校内研究授業
第2学年2組 算数科 単元名「図をつかって考えよう」
授業者 滝島 聖也 教諭
※②～④の研究授業の指導者 十文字学園女子大学 副学長 安達 一寿 様</p> <p>⑤研究グループ毎の公開授業及び協議会の実施、報告書作成
※研究授業(計3回)・公開授業(計11回)は、すべてICTを活用した授業を実施</p> <p>⑥「クロームブックの使い方に関するアンケート」「学習に対するアンケート」の実施(2回)</p> <p>⑦タブレットを活用した授業実践に関する勉強会の実施(複数回)</p> <p>⑧情報活用能力シート(学年毎のICT活用の技能一覧表)の作成</p> <p>⑨授業実践の記録掲示</p> |
|---|

4 研究2年目 「研究主題に迫る授業の立案（ICTを手段として）」

<背景>

- ① ICTという新たな教育の道具を生かし、対話的な学びを活発にさせたいという教師の願いがある。
- ② 日々の授業をシンプルに捉え、より丁寧に授業実践を積み重ねていきたいという教師の願いがある。
- ③ 「みんなの前で発表できるようにしたい」「表現内容をレベルアップさせたい」という対話を通じた学びへの児童の願いがある。

<研究2年目（令和4年度）の主眼>

- ① 「アクティブ・ラーニング」・「ルーブリック評価」の導入
- ② 3つの実態調査分析
- ③ 教科を国語科に限定

<2年目に意図していたこと>

- アクティブ・ラーニングにおける対話的活動に焦点を当てながら意図的に協働学習を仕組み、ルーブリック評価を実施することで、「指導と評価の一体化」を図り、学びの質を向上させた授業改善を目指す。

(1) 「アクティブ・ラーニング」・「ルーブリック評価」の導入

1年目の成果により、児童も教師もICTを活用した授業については、そのハードルを下げる事ができた。2年目からは、ICTを手段として本校の課題の一つである、「対話的な学習」に焦点を当てた授業の実践に臨んだ。対話的な学習を促進させ、学び合いを通して主体性を育み、いかに研究主題『主体的・対話的で深い学びの創造』～ICTを活用した授業実践を通して～に迫れるかを議論し、必要性からアクティブ・ラーニングを導入した。

同時に、ルーブリック評価を実施することで、教師にとっての「指導と評価の一体化」、児童にとっての「学びと評価の一体化」を図った授業展開を目標とした。

(2) 国語科を中心とした授業の組立

アクティブ・ラーニングは、どの教科でも取り入れることのできる学習形態である。しかし、教科が複数に分かれていると、アクティブ・ラーニングの指導方法の深い研究につながらないのではないかとの意見が挙がった。そこで、本校の学力向上プランや学力テストの結果を踏まえ、教科を国語科に限定した。アクティブ・ラーニングという学習形態や指導技術の研修を主として、国語科という教科を中心に研究を進めていくこととなった。

(3) 2年目の取組の成果

① 学ぶ必要感

児童の視点に立ち、児童が学ぶ必要感をもって授業に臨めるように、単元の導入で「インストラクション」を丁寧に言い、大切な時間として捉えてきた。単元や題材に取り組む意味、様々な言語活動を仕組む趣旨の説明、授業終了時の望ましい姿や結果、学びに向かう姿勢、教師の思いなどを、意識的に伝えてきた。その結果、児童にとって「学ぶ必要感」を生むことができるようになってきた。また、単元や題材の目標を達成するための対話的な活動も、必然性をおびてくるようになった。

②対話的な活動

「全体の前での発表」に苦手意識をもっている児童の実態から、ICTを活用した対話の在り方を模索した。2年目のメインは、ロイロノートの活用であった。「通常ノート」での、意見の可視化を始め、協働的に学ぶ場面では「共有ノート」を活用した。また、Googleスライドやジャムボードも学習の状況によって活用し同時編集を可能にした。対話の捉え方を広くしたことで、児童同士のコミュニケーションやチームワークが向上した。

③ルーブリック評価の導入

アクティブ・ラーニングの授業を進めるからこそ、評価に対する意識を児童も教師も、確実にもつ必要があった。評価意識が無ければ、「活動あって、学びなし」に陥りかねない。このようなことを防ぐために児童と教師が共通理解を図りながら、協働的に学習を進めるためのルーブリック評価を導入した。導入の効果としては、教師にとって指導内容が明確になり、指導がぶれずに単元や題材を進められることである。同じく児童にとっても、学ぶべきことや目指すゴールがはっきりと理解でき、何が足りないのかを明確にしながら授業に臨むことができる。

④情報活用能力の育成

どの学年もICTを活用する場面を意図的に増やしたことで、タイピングスキルが飛躍的に伸びた。中・高学年平均で3分間に224文字という実態があり、これは、文科省が目標としている10分間に100～200字を大きく上回っている。さらに、中学年は、ロイロノートやスライドなどのアプリの活用がスムーズに行えるようになり、高学年は自らどのアプリを用いて学びを深めようか選択できるまでになっている。考えを速やかにまとめたり、発表を補助する道具として活用したりして、成果が表れ始めた。

(4) 研究2年目の歩み

①第1回校内研究授業

第3学年2組 国語科 単元名「登場人物の変化に気を付けて読み、感想を書こう」
教材名「まいごのかぎ」 授業者 室井 薫平 教諭

②第2回校内研究授業

第2学年3組 国語科 単元名「説明のしかたに気を付けて読み、それをいかして書こう」
教材名「馬のおもちゃの作り方」 授業者 深川 亮介 教諭

③第3回校内研究授業

第5学年2組 国語科 単元名「事例と意見の関係をあわせて読み、考えたことを伝え合おう」
教材名「想像力のスイッチを入れよう」 授業者 山崎 憧羽 教諭
※①～③の研究授業の指導者 十文字学園女子大学 副学長 安達 一寿 様

④小研究グループ毎の公開授業及び協議会の実施、報告書作成

※研究授業(計3回)・公開授業(計17回)は、すべてICTを活用し、ルーブリック評価の実施、児童同士の対話活動を意図的に組み込んだ授業を実施

⑤アクティブ・ラーニング・ルーブリック評価に関する勉強会の実施(複数回)

⑥「アクティブ・ラーニングに関するアンケート」「国語に対する実態調査」の実施(年3回) 「学級力アンケート」の実施(年2回)

⑦階段掲示による児童の語彙力の啓蒙

⑧タブレット貸出に関する保護者向け「承諾書」の作成

⑨タイピング練習に係るアプリの導入、タイピング検定表作成と活用

5 研究3年目 「研究主題に迫る授業の質の向上」(ICT活用の日常化)

<背景>

- ① ICTの日常化により、対話活動がスムーズになってきているが、質の向上を図りたいという教師の願いがある。
- ② 評価意識に対する高まりによる、ブレない授業実践の蓄積を図りたいという教師の願いがある。
- ③ 根強く残る「発表への児童の苦手意識」を打開したいという教師と児童の願いがある。

<研究3年目(令和5年度)の主眼>

- ① アクティブ・ラーニングの系統性
- ② ルーブリック評価の多様性
- ③ 学級力の充実

<3年目に意図していたこと>

- ① 発達段階を踏まえた「アクティブ・ラーニング」・「ルーブリック評価」を仕組み、必要感のある対話的な学習を通して授業の質を高め、研究主題に迫る実践を目指す。

(1) 研究授業に係る先行授業

1学期に「1年生・3年生・5年生」において、研究授業へ繋ぐための先行授業を実施した。児童の実態から出発し、学ぶ必要感や対話する必然性、ルーブリック評価の内容を追求し、授業を組み立てた。授業内容については割愛するが、協議会で挙げた課題は、次の3点である。

- ① 国語科の言語活動を位置付けるときに、児童を主体的・対話的な活動へ導くために、相手意識や目的意識をさらに高める必要があること。
- ② ルーブリックの内容を児童に分かる言葉に置き換えるとき、本来の評価内容と意図がずれないようにすること。
- ③ 情報活用能力の研究の三本柱の捉え直し

以上の3点を踏まえ、研究授業の内容について検討することとした。

(2) 研究3年目 研究発表までの歩み

① 第1回プレ授業

第3学年1組 国語科 単元名「大事なことを考えて、あんないの手紙を書こう」

教材名 「気持ちこめて『来てください』」 授業者 富岡 翔悟 教諭

指導者 教育委員会教育支援課 指導主事 佐久間 雄一 様

② 第2回プレ授業

第5学年1組 国語科 単元名「調べたことを正確に報告しよう」

教材名 「みんなが過ごしやすい町へ」 授業者 坂田 理恵 教諭

指導者 十文字学園女子大学 副学長 安達 一寿 様

③ 第3回プレ授業

第1学年2組 国語科 単元名・教材名 「くちばし」 授業者 河辺 茜 教諭

指導者 片山小学校校長 戸高 正弘 様

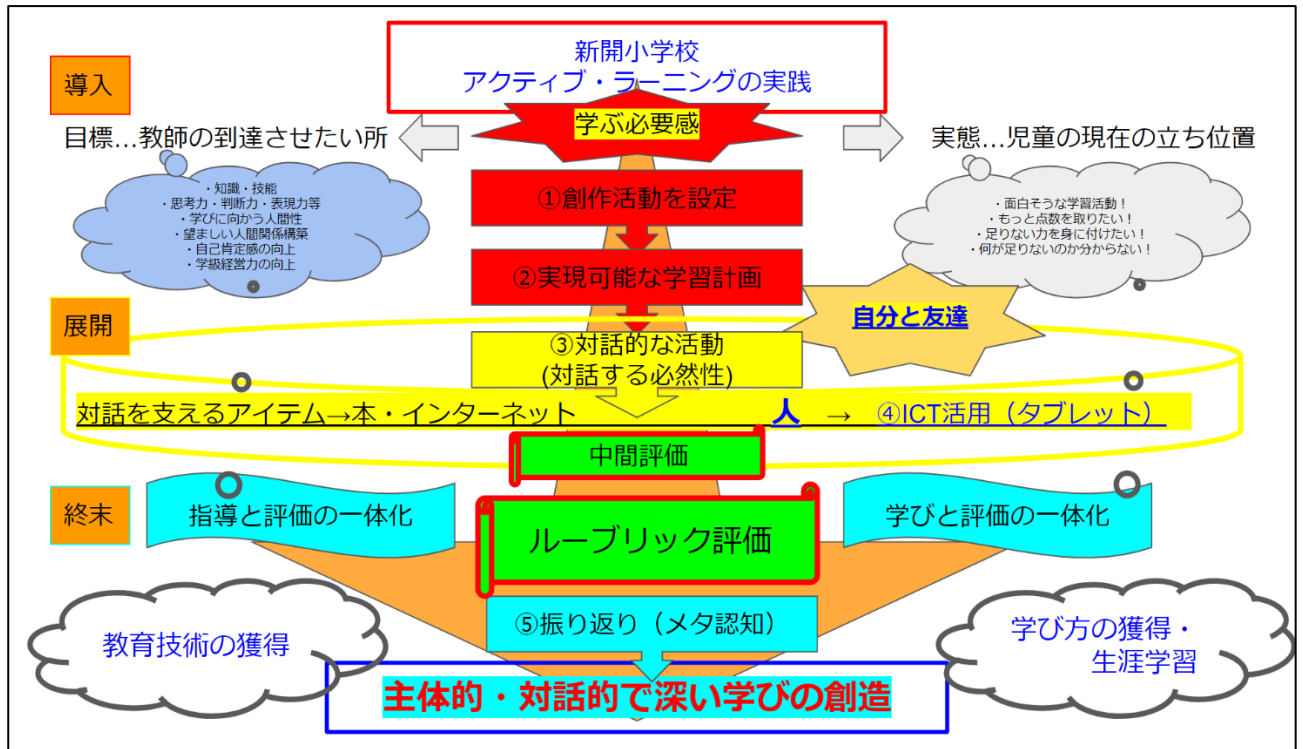
- ④ 「学力向上プラン」との整合性を図りながら、「つかむ」「考える」「深める」「振り返る」の授業展開の再確認

IV 各部の取組

授業研究部

1 アクティブ・ラーニングについて

アクティブ・ラーニングの授業イメージ



(1) アクティブ・ラーニングとは

アクティブ・ラーニングとは、**課題解決学習**のことである。児童が問題を捉え、課題やめあてを立て、問題や課題を解決するために、個人の考えをもって友達と協力し、学び合いながら学習を完結させていく学習形態である。

また、アクティブ・ラーニングにおける教育の効果は、21世紀型スキルの育成ともいわれ、「学力の向上」「対話の能力・技術の向上」「集中力や学習意欲の向上」「認め合いのできる学級経営＝人間関係の醸成」「生徒指導上の課題解決」「社会参画の意識向上」など、様々な力を育成していく可能性のある学習形態であると捉えている。さらに、アクティブ・ラーニングは、児童一人一人の思考過程に目を向け、児童一人一人のメタ認知能力を高めるということも期待されることから、「達成感・自尊感情・自己肯定感の向上・自己指導能力の育成」にも有効だと考える。

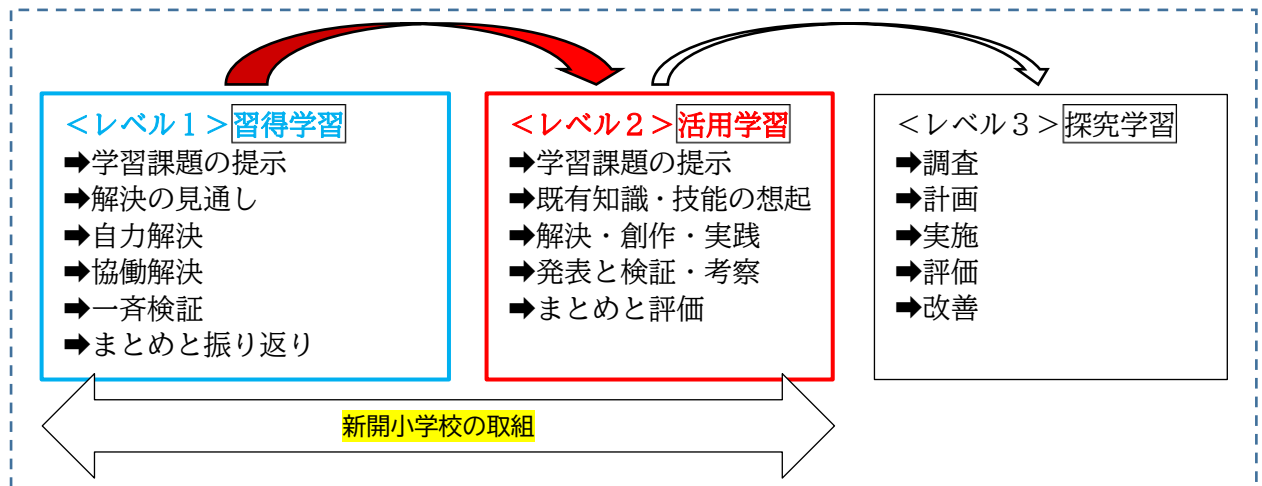
(2) アクティブ・ラーニングでねらう2つの授業レベル

先行研究における著書によると、アクティブ・ラーニングは、**習得学習（レベル1）⇒活用学習（レベル2）⇒探究学習（レベル3）**の3段階で授業レベルが向上していくとされている。

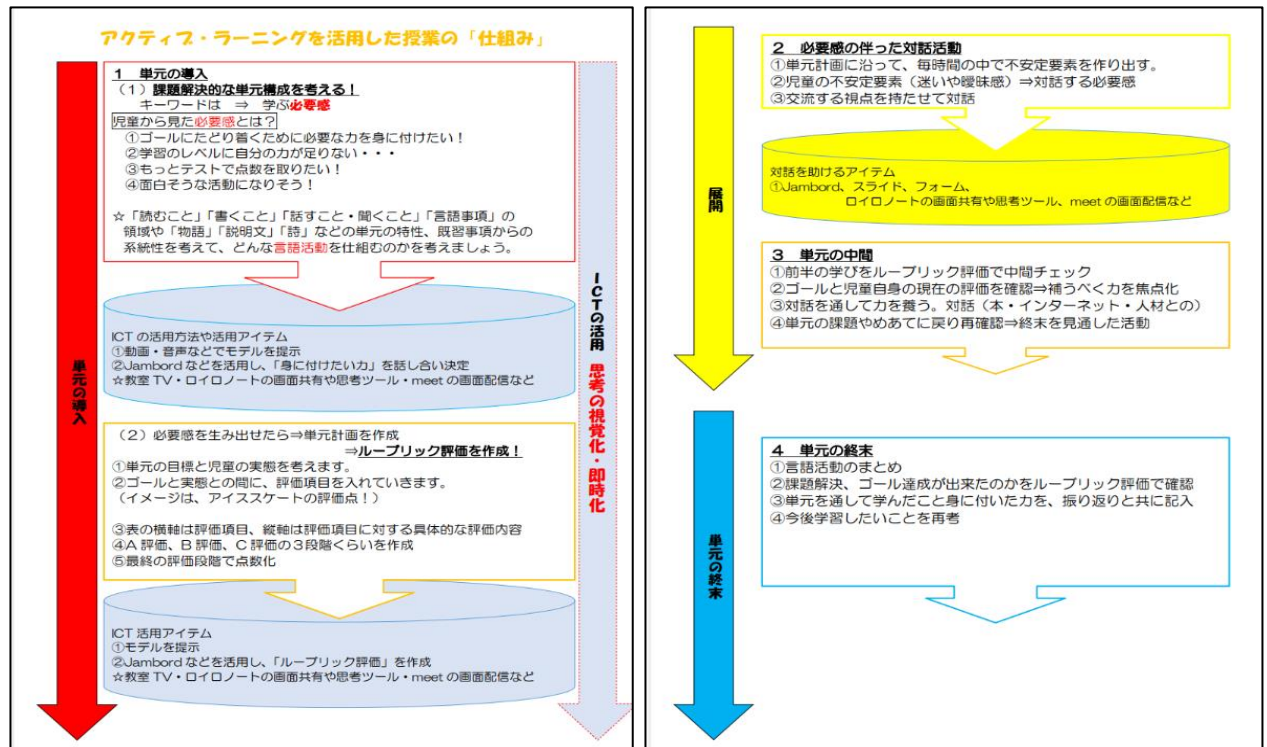
習得学習（レベル1）では、課題を提示し、教師主導でアクティブ・ラーニングの学びが成立するように示していく。**活用学習（レベル2）**では、課題を自分たちで立てられるよう教師が補助的に関わり合い、授業を進めていく。そして、**探究学習（レベル3）**になると、児童自らで課題を立て、PDCAサイクルで授業を捉え直し、児童自らが探究的に学習を進めていくことができるようになる。

本校の児童の実態を鑑み、本校として目指したアクティブ・ラーニングは、**習得学習（レベル1）**と**活用学習（レベル2）**の2つの段階である。

【アクティブ・ラーニング 3つのレベル】



(3) アクティブ・ラーニングの授業の展開



アクティブ・ラーニングの導入の意図は、上記にあるように「必要感のある導入→単元や題材全体の見通し→単元や題材を貫く言語活動の設定→課題を解決する必要感・必然性のある対話と活動を補うICTの活用→ルーブリック評価→振り返り」と、今まで行ってきた授業をより丁寧に実践していこうとするところにある。大切にしてきたことは、「学ぶ必要感」「言語活動に関わる対話による学び合い」「評価活動」である。特に単元の導入時に、授業の必然性や目的、方向性、授業に取り組む価値を伝える「インストラクション」は、授業を展開していく上で要となる時間である。児童と教師が互いに授業の意図を共有することで、後の評価活動が円滑になる。

インストラクションの内容

- ① 「課題の提示または構築」…授業内容を伝達する。
- ② 「交流の方法」…どのように話し合いを進めていくのか、その方法と見通しを提示する。
- ③ 「学ぶ価値」…課題について考える価値や意義について伝え、意欲を喚起させる。

(4) アクティブ・ラーニングの授業実践に必要な要素

①学習モデルの提示

- ・対話する（話型）・文章を書く（文型）・考える（思考型）
→手順を示すことで、言語活動や思考活動の促進を図る。
- ・低位の児童にも配慮した、ユニバーサルデザインとしての位置付けにもつながる。

②学習ツール

- ・思考ツール、分析ツール、情報活用・自己表現ツール（ICTの活用をメインとして）
→様々なツールを取り入れ、学びを広げ・深めていく手段としての活用を図る。

③学習チーム

- ・小集団による協働解決・共同制作の場面の構築、異なる考えを比較し、発表し合う場面の構成、学習のルールを作り、守り合う場面を設定する。
→協働する組織の構築を図り、学級力向上を図る。

④学習ルール…授業規律

- ・1年生～6年生までの系統的な学習ルール
→守る意味をしっかりと児童と共有し、ちくちく言葉の無い関係作りをする。
→さらに、互いに注意し合える関係を構築する。

⑤多様な視点からのアクティブ化

「課題設定」「思考」「メタ認知」「対話」「資料活用」「考察」「表現」「評価」場面など、様々な視点から、授業の活性化を図る。

⑥授業をトータルで見直す視点の提示

- ・学習目標・学習課題・学習内容・学習形態・学習方法・活動系列・メディア活用などの見直し
- ・教材リソース、学習環境・評価方法（ルーブリック評価、自己評価と相互評価）などの項目から、授業がシステムとして成り立っているか再確認する。

2 ルーブリック評価について

ルーブリック表					
評価	題材設定、内容検討、情報の収集	構成の検討	考えの形成・記述	推敲	言葉の特徴や使い方
3					
2	A	B	C	D	E
1					
備考					

※基本として、指導要領の文言をそれぞれの評価段階の3（最高位）に設定し、評価段階の3からキーワードを抜いていく形式で評価段階の2、1を作成する。

(1) 絶対評価のための判断基準表

- ・テストでは評価しにくい資質・能力の観点について、客観的でより高い妥当性・信頼性をもちながらできる評価
- ・子供たちのパフォーマンス評価をもとめる際に、評価の観点を明確にするための評価
- ・教師の指導のブレを防ぐための羅針盤
- ・児童の学習のアクティブ化を図り、自己評価力を高める指標

(2) ルーブリック評価を取り入れる経緯

P12で少し触れているが、アクティブ・ラーニングによるグループ活動や課題発見・解決に取り組む学習形態を実施する際、テストによる点数化だけでは評価できない場面が存在する。児童の思考や表現、言語活動等の到達度を把握しやすくすることで、児童の学びに向かう姿勢の向上や協働的な課題の発見・解決を進めることを期待できる。そのため、教師側の「指導と評価の一体化」の定着、児童側の「学びと評価の一体化」という目的意識及び評価意識をもった学習活動につながり、本校の児童の学力向上に繋げることができると考えた。

(3) 「ルーブリック評価」に関する振り返り

以下は、2年目から実施した「ルーブリック評価に関する振り返り」である。成果と課題の両方が児童と教師双方から挙がった。ルーブリック評価を児童の実態や単元や題材に合わせていくことの難しさはあるが、これを導入したことで、学びに一本の筋が通り、その効果を実感できる児童や教師が多くいることも分かった。

<p>児童の声</p> <p>低学年</p> <ul style="list-style-type: none">○自分がクリアするためのポイントが分かりやすくてよかった。○文章だったら、なんの項目を入れなくてはならないのかが分かってよかった。○自分の進む道が分かりやすい。△出来ていないときに、プレッシャーになる。△クリア出来ないときに、どうしたらクリアできるようになるのかが分からなくて、悩んでしまった。 <p>中学年</p> <ul style="list-style-type: none">○これであればA評価になる、できなければB評価になるなど、やるべき事がはっきりするのでやる気がする。○ルーブリック表にはレベルがあるので、早く達成しよう、と自分から理解を深める行動をする事が出来て、とても授業がスムーズに進んだ。△自分の今の位置が、自分が目指したい目標とかけ離れていると「そんなにがんばれない」と思ってしまう。・他にルーブリック表に書いてある事が出来たらこれが出来る様になる、という例を入れたら、次はこんな活動をやるんだな、と考える事が出来て、より授業に対する理解度が高まると思う。 <p>高学年</p> <ul style="list-style-type: none">○自分が今回どこまで行ったか次はどのレベルを目指そうかなど一目見ただけで今自分がどこにいるかがわかる。○目標を立てて取り組める。○目指すべき目標がわかり、やる気に繋がっていいと思う。○良かったと思う。①どこを目標にしたらいのかが分からなくなるときがあるから②自分の評価が分かるから。△あってもなくても変わらないので自分的にはつくる(ルーブリック評価)時間が無駄だと思う。 <p>教師の声</p> <p>低学年</p> <ul style="list-style-type: none">○子供たち自身が、どのように学びを進めていくのかの道筋になっていたと感じる。それを意識して学習を進められている児童もいた。○振り返りの視点となっていて、よかった。○よく出来る子ほど、目標をしっかりとりとらえて学習を進めていた。△個人で作成するのではなく、学年や学校で取り組んでいくと共通理解のもと学習過程を組み立てられると感じる。△そもそも自己評価だけでは成り立ちにくい気がする。(下の学年になればなるほど) <p>中学年</p> <ul style="list-style-type: none">○学習の到達目標が明確で、見通しをもって学習に取り組める△教師の言葉、児童の言葉2通り用意する手間がある。△作成に多くの時間を要するので、どの教科でも、毎単元作成できるものではないと感じた。△児童の自己評価が適当でいいかげんであることがあった。児童の自己評価と、他者や教師の評価を突合し、自己評価と他者評価(教師の評価を含む)の整合性を図る必要があると感じた。そうでないと、いいかげんな自己評価で終わってしまう。△3年生だからとも言えるが、そもそも自分の成果物を客観的に評価するのは難しい。いくら児童用のルーブリックを開示しても、自分の到達度がどこに位置しているのかを児童自身が評価するのは難しい。・作成が大変。校内研究用として用いていくのはいいと思うが、普段からこれを毎時間行うのは現実的に不可能。この研究主題が終了したあとに果たしてどのような形で新聞小に残していくかを考えていく必要があると感じた(いわゆる出口戦略の策定)。3年間だけやって終わりではもったいないです。また、作成が大変なことから、研究して磨いてきたものを日々の授業に還元できない(毎時間行うのは難しいため)のも、もったいない気がします。・単元を通して何を学習するのか意識をもち、観点を意識して取り組んでいた。その結果、身に付けさせたい力を高める事ができた。ただ、文言が難しく児童への説明を要したので、分かりやすい表記に変える必要がある。 <p>高学年</p> <ul style="list-style-type: none">○児童の反応から、「どんなことができればいいのか」というゴールが明確になっていることが、学習への意欲や達成感を感じさせることに繋がっているのだと分かった。・実施については、教材研究に加えてルーブリック評価の作成となると、全単元での実施を考えると多くの時間を要すると感じる。学校や学年内においてデータの共有をはかり、次年度以降にも引き継げる仕組みの構築があると負担軽減並びにルーブリック評価への取掛かりが楽になると思う。・児童の意欲は格段に上がったと感じる。また、評価する際も、迷わずに評価することができるので、教師にとってもいいと思った。ただ、自己評価する時に難しい文言もあるので、言葉や表現の工夫は必要だと感じた。 <p>ひまわり</p> <ul style="list-style-type: none">・客観視できないため、全て良い自己評価にしてしまう。そのため、その日の達成状況を教師が記録していかないといけないと感じた。 <p>担外</p> <ul style="list-style-type: none">○ルーブリックを始める前と比べて、評価規準が明確になり、可視化したことで、A+を目指して意欲的に取り組む児童が増えた。○本時のルーブリック(児童の自己評価)を児童と一緒に決めた時は、いっそう意欲が高まっていた。○ルーブリックを使うと、1時間の内で中間評価、最終評価ができる。児童の伸びを見取ることができる。「主体的」の評価がしやすくなった。

(4) ルーブリック評価作成の視点

(3)「ルーブリック評価」に関する振り返りを踏まえ、「国語科、もしくはアクティブ・ラーニングに精通している先生でないと作りにくい・使いにくい」ではなく、「すべての先生が教科や項目を問わずに作って使える」ものを意図した。段階的にルーブリック評価の在り方を模索し、本校としては敢えて限定的な型は設定していない。

3 アクティブ・ラーニングを支える手立て

(1) 授業展開の中での手立て

以下は、アクティブ・ラーニング導入後から研究授業・公開授業において実践してきた手立てを
集約したものである。国語科に絞った研究であるが、他教科での実践も参考にして集約した。

【手立て】	
つかむ	<p>A 必要性、必然性のある課題提示の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の身近な題材から課題を設定する。 ・疑問や驚きを生み出す提示の工夫をする。 <p>B ルーブリック評価の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「①つかむ」の段階で、振り返りの視点を明確にし、「④振り返る」において児童の自己肯定感が高まる評価（ルーブリック評価）ができるようにロイロノートを活用する（ICTの活用）
考える	<p>A 問題に取り組む時間の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を振り返りながら、自分なりの考えを書きだす時間を確保する。 <p>B 考えを可視化するためのICTの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロイロノートを活用し、自分の考えを整理する。（ICTの活用）
深める	<p>A 話し合いの視点の明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの際に、話し合うねらいと視点を明確にする。 <p>B 話し合いの話形を示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの際に、意識させる話形を提示することで双方向のやりとりを意識させる。
振り返る	<p>A メタ認知を意識させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の学び方を振り返らせ、次の学びへの意欲を高めさせる。 ・ルーブリック評価を行うことで、今の自分を振り返る。（ICTの活用）
↓	
振り返りの8視点 （社会に開かれた教育課程の振り返りの視点）	
①わかったこと、できるようになったこと	⇒主体的な学び
②わからなかったこと、できなかったこと	⇒主体的な学び
③友達の考えを聞いて思ったこと	⇒対話的な学び
④自分の考えが変わったこと	⇒対話的な学び
⑤自分にとって役に立ったこと	⇒実生活とのつながり
⑥生活にいかしたいこと	⇒実生活とのつながり
⑦疑問に思ったこと	⇒深い学び
⑧もっと知りたいこと	⇒深い学び

(2) 学年に応じた話型の提示

思考の促進、円滑な対話的活動を実施する為に、国語科だけでなく様々な教科で実施している。

学習で活用できる話型(1～3年)	
自分の考えを発表するとき	
①	まず、つぎに、最後に、
②	1つ目は……です。2つ目は……です。 なぜなら、(どうしてかという点)……だからです。
話し合いをするとき	
①	同じところは……です。違うところは……です。
②	〇〇さんに付けたして、……だと思えます。
③	〇〇さんはこう言っていました、わたしは△△だと思えます。
相手に質問をするとき	
①	〇〇とは、どういうことですか？
②	もう少し、……について教えてください。
③	どこから、そのように考えたのですか？
④	私は、……と考えますが、どう思えますか？
⑤	……だと言いましたが、例えばどういうことですか？

学習で活用できる話型(4～6年)	
自分の考えを発表するとき	
①	まず、つぎに、最後に、
②	1つ目は……です。2つ目は……です。 なぜなら、(どうしてかという点)……だからです。
話し合いをするとき	
①	同じところは……です。違うところは……です。
②	〇〇さんに付けたして、……だと思えます。
③	〇〇さんはこう言っていました、わたしは△△だと思えます。
相手に質問をするとき	
①	〇〇とは、どういうことですか？
②	もう少し、……について教えてください。
③	どこから、そのように考えたのですか？
④	私は、……と考えますが、どう思えますか？
⑤	……だと言いましたが、例えばどういうことですか？

(3) 対話をつなぐ技能ポイント

発信するとき・傾聴するときのポイントを明確化し、円滑な対話的活動へ繋げることができた。

発信の5ポイント		傾聴の5ポイント	
①発声	上向きの声	①正対	体を向ける
②明言	～です。～ます。句点の多用	②視線	目を合わせる 目で聴く
③動作	目線 指 身ぶり 手ぶり	③姿勢	べったん・びん・グーグー
④確認	～ですよね？ ～じゃないですか？	④反応	あいづち マジックワード あ…あお～ い…いいね～ う…うんうん え…えっ！？ お…お～！ す…すごい な…なるほど お…おもしろい
⑤質問	～は何ですか？ ・何か質問はありますか？ ・ありがとうございました。 ⇒拍手	⑤尊重	相手の意見も、自分の意見も認めよう！

(4) 学年毎のICT活用の技能一覧表

1年生から6年生までの、各学年におけるICT活用の到達目標を示した一覧表を作成した。意識したのは系統性で、授業の中でタブレットを活用していれば自然に身に付くという考え方ではなく、各学年で身に付けるべきことを明確にしたことである。これを基準とすることで、児童間のICTに対する知識や技能の差を小さくすることができた。さらに、次の年度に担任となった教員も一律に授業でICTを導入することができ、円滑な授業改善につながった。

情報活用能力シート		1年生	2年生	3年生	4年生	令和4年度 授業研究部					
						5年生	6年生				
基本的な機能	写真を撮る	○	○	○	○	○	○	○・・・使える △・・・使える児童もいる 一・・・使えない(使わない)			
	写真をはりつける	—	○	○	○	○	○				
	ネットで調べる	—	○	○	○	○	○				
	手書き入力できる	○	○	○	○	○	○				
	音声入力ができる	○	○	○	○	○	○				
	キーボード入力ができる	△	△	○	○	○	○				
	読み上げ機能を使う	—	—	○	○	○	○				
Google	Googleミート	○	○	○	○	○	○				
	クラスルーム	○	○	○	○	○	○				
	Googleフォーム(作る)	—	—	△	○	○	○				
	Googleチャット	—	—	—	—	—	△	※毎年トラブルになっているので扱い注意			
	Googleドライブ	—	—	—	○	○	○				
	ジャムボード	—	—	—	—	—	—				
	スライド	—	—	△	○	○	○				
	ドキュメント	—	—	○	○	○	○				
スプレッドシート	—	—	—	—	—	—					
ロイノート	翻訳	—	—	—	—	○	○				
	テキストカードを作成できる	○	○	○	○	○	○				
	画像を挿入できる	○	○	○	○	○	○				
	生徒間通信ができる	○	○	○	○	○	○				
	シンキングツールを使う	—	—	△	△	△	△				
	課題を提出できる	○	○	○	○	○	○				
	プレゼン資料を作成できる	—	○	○	○	○	○				
その他	共有ノート	—	—	○	○	○	○				
	テストカード	—	—	○	○	—	—				
	スクラッチ	—	—	○	○	○	○				
	ウゴトル	—	—	—	—	—	—				
	Sagasokka総合百科事典 ポブラディア	○	○	○	○	○	○				

(5) 学級力を高める指導方法の改善

授業研究部は、3年間を通して授業力向上を目指し、公開授業・協議会の計画・実施・検証を行ってきた。年次やブロックに偏ることなく、アクティブ・ラーニングを生かし、ICTを活用した授業実践に積極的に取り組めるよう、配慮してきた。また、指導案の内容や形式の検討も合わせて行い、アクティブ・ラーニングの学習形態の基礎を作り上げた。さらに、学級力を高める指導方法を改善する為に、教師同士の関わりを密にし、教師一人一人の人材リソースを活用した研修を随時仕組むことができた。

調査部

1 研究1年目の調査・分析・結果

研究1年目は、児童の実態を把握するためのアンケート作成に取り組み、「Chromebookの使い方」及び、「学習に対する自分の気持ち」の2種類のアンケート調査を1学期末と2学期末に実施した。

(1) 低学年（1～3年生）

【アンケート項目】

ふりかえりアンケート(低学年)

年 組 番 号

1. chromebookのつかいかたについて(番号を1つ○でかこみましょう)

4: あてはまる 3: どちらかといえばあてはまる 2: あまりあてはまらない
1: 全くあてはまらない

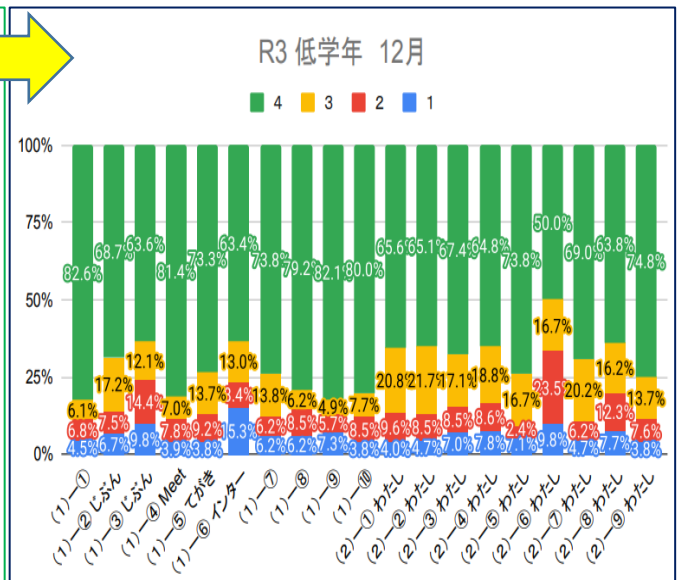
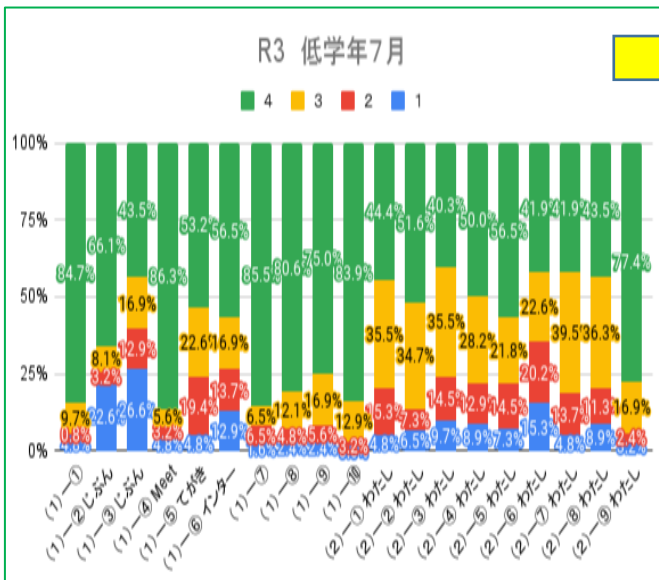
項目	内容	評価
1 使い方	chromebookにログインすることができます。	4 3 2 1
2 使い方	自分のchromebookで写真をとったり、動画を撮ったりすることができます。	4 3 2 1
3 使い方	自分のchromebookでとった写真や動画を見かえて、授業のときにつかうことができます。	4 3 2 1
4 使い方	Meet でクラスルームにさんかすることができます。	4 3 2 1
5 使い方	手書きや音声で文字を入れることができます。	4 3 2 1
6 調べ学習	インターネットをつかって、知りたいことをしらべることができます。	4 3 2 1
7 意欲	Chromebook を使った授業は、好きです。	4 3 2 1
8 意欲	Chromebook を使えるようになり、勉強の役に立つようにしたいと思います。	4 3 2 1
9 規範意識	chromebook の使い方のルールを知っています。	4 3 2 1
10 規範意識	chromebook の使い方のルールを守っています。	4 3 2 1

2. 学習に対する自分の気持ち(番号を○でかこみましょう)

4: あてはまる 3: どちらかといえばあてはまる 2: あまりあてはまらない
1: 全くあてはまらない

内容	評価
1 わたしは、自分から進んで勉強をしています。	4 3 2 1
2 わたしは、授業中のもんだいに たいして、しらべたり 考えたりしながら、あきらめずに とりくんでいます。	4 3 2 1
3 わたしは、勉強したことを ふりかえり、つぎのじゆぎょうにつなげられるようにしています。	4 3 2 1
4 わたしは、知りたいことがあったとき、本や図かん、インターネットなどをつかってしらべています。	4 3 2 1
5 わたしは、先生やいすの人、友だちと きょうりよくしながら、もんだいをといています。	4 3 2 1
6 わたしは、自分の考えをみんなの前で発表しています。	4 3 2 1
7 わたしは、友達の発表をよく聞き、さらに学びを深めようとしています。	4 3 2 1
8 わたしは、勉強したことを生活の中で生かしています。	4 3 2 1
9 わたしは、新しいことをもって学びたいと思っています。	4 3 2 1

【結果】



【考察】

- ①低学年全体で考えると、Chromebookの使い方の基礎技能の向上が見られる。
- ②Chromebookを活用することに意欲的な傾向が見られ、苦手意識をもっている児童は少ない。
- ③オンライン授業の効果もあり、(1)－4「meetに参加」、(1)－5「文字入力」の項目が伸びている。
- ④「2.学習に対する自分の気持ち」の項目では、伸びている項目が多いが、(2)－6「自分の考えをみんなの前で発表している。」の項目が伸び悩んでいる（高学年も同様）。
- ⑤低学年での自由記述欄は設けていなかったが、高学年の(1)－10「Chromebookを使うことで、分かるようになった勉強」の項目に関する意見を低学年児童に聞いてみると、「友達の意見がすぐに見られる。」「映像を観ることでイメージが繋がる。」との回答が多かった。

(2) 高学年（4～5年生）

【アンケート項目】

ふりかえりアンケート(高学年)

年 組 番 袋 変 え

1. Chromebookについて (番号を1つ〇でかこみましょう。)

4 : あてはまる 3 : どちらかといえばあてはまる 2 : あまりあてはまらない
1 : 全くあてはまらない

項目	内容	評価
1	タイピング キーボードで文字を打ち込むことができます。	4 3 2 1
2	調べ学習 インターネットを活用して知りたいことを調べることができます。	4 3 2 1
3	使い方 Meet への参加や意見交流の仕方を理解しています。	4 3 2 1
4	使い方 Jambordを使うことができます。	4 3 2 1
5	使い方 スライドを使うことができます。	4 3 2 1
6	活用 chromebookを使うことで、前よりも自分の考えや意見を発表できるようになりました。	4 3 2 1
7	活用 chromebookを使うことで、友達のような意見や考えを知ることができます。	4 3 2 1
8	意欲 chromebookを使うことで、様々な意見や考えを比べたり、組み合わせたりして、自分の考えを深め広げることができます。	4 3 2 1
9	結果 Chromebookを使うことで、勉強が分かるようになりました。	4 3 2 1
10	理由 とくに、どんな勉強が分かるようになったのか？	
11	意欲 Chromebookを使った授業は、好きです。	4 3 2 1
12	意欲 Chromebookを使うのは勉強の役に立つと思います。	4 3 2 1
13	意欲 Chromebookを、より使いこなせるようになります。	4 3 2 1

14	理由	なぜそう思うのか？
15	規範意識	chromebookの使い方のルールを知っています。
16	規範意識	chromebookの使い方のルールを守っています。

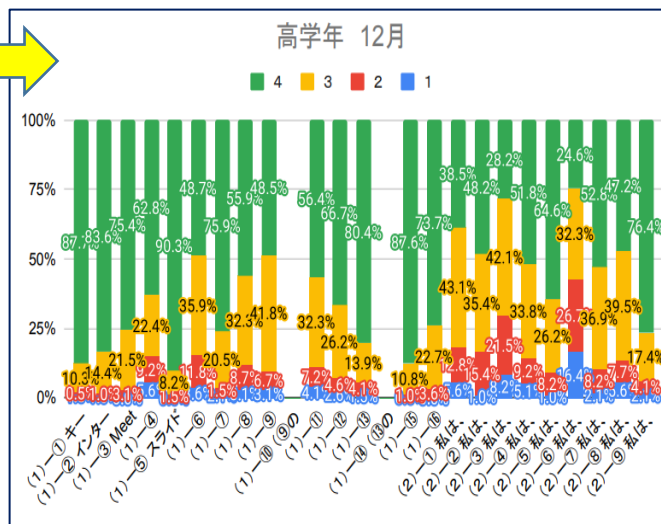
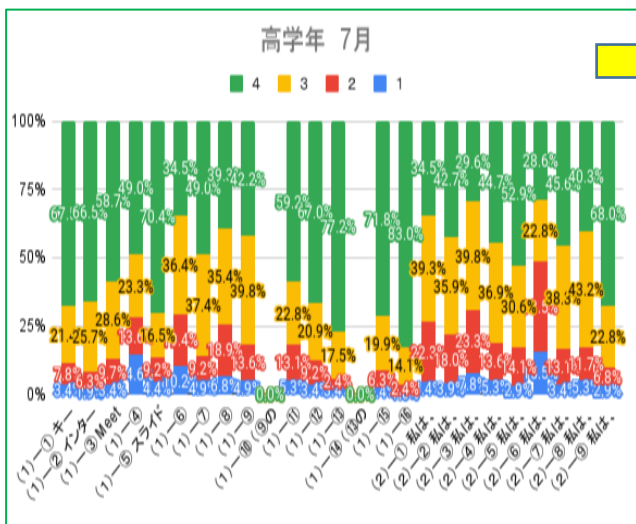
どんなことを守るひつようがありますか？

2. 学習に対する自分の気持ち (番号を〇でかこみましょう。)

4 : あてはまる 3 : どちらかといえばあてはまる 2 : あまりあてはまらない
1 : 全くあてはまらない

	内容	評価
1	わたしは、自分から進んで勉強をしています。	4 3 2 1
2	わたしは、授業中の問題や課題に対して、調べたり考えたりしながら、ねばり強く取り組んでいます。	4 3 2 1
3	わたしは、学習したことをふり返る時間をつくり、学んだことを次の時間につなげられるようにしています。	4 3 2 1
4	わたしは、本や図鑑、インターネットなどの資料を活用しています。	4 3 2 1
5	わたしは、先生や親、友達と協力しながら、問題を解いたり、課題を解決したりしています。	4 3 2 1
6	わたしは、自分の考えをみんなの前で発表しています。	4 3 2 1
7	わたしは、友達の発表をよく聞き、さらに学びを深めようとしています。	4 3 2 1
8	わたしは、学んだことを生活の中で生かしています。	4 3 2 1
9	わたしは、新しいことをもっと学びたいと思っています。	4 3 2 1

【結果】



【考察】

- ①高学年全体でも、Chromebookの使い方の基礎技能の向上が見られる。
- ②Chromebookを活用することに意欲的な傾向が見られるが、顕著な伸びは見られない。
- ③「1.Chromebookについて」も伸びている項目が多い。しかし(1)-9「Chromebookを使うことで、勉強が分かるようになりましたか。」の項目は、1学期からの変容は見られず、高評価の割合も約50%と低い水準である。
- ④(1)-10「Chromebookを使うことで、分かるようになった勉強」(自由記述)では、「算数科や社会科、国語の意味調べ、総合の発表」と答えた児童が多かった。
- ⑤(1)-14「Chromebookをより使いこなせるようになりたい理由」(自由記述)では、「将来役に立つから。」「より授業の効率が上がるから。」「コロナで会えなくても、意見の共有ができるから。」と前向きな意見が多かった。一方で「使い方のルールが守れていない人がいてこまる。」「ノートとタブレット両方に記録をとることが二度手間」という意見もあった。
- ⑥「2.学習に対する自分の気持ち」の項目では、伸びている項目が多い。しかし(2)-6「自分の考えをみんなの前で発表している。」の項目は、1学期からの大きな変容は見られず、高評価の割合も約60%と伸び悩んでいる。

【研究1年目の考察のまとめ】

1年目は、ICTの活用を目的とし「教師も児童もタブレットを活用し、慣れること」であった。その目標は、達成しつつあると考える。しかし、研究主題である「主体的・対話的で深い学びの創造～ICTを活用した授業実践を通して～」に対する授業実践や授業改善への手立て、本校の目指す児童像達成まで道のりはまだ遠かった。2年目からは、ICTの活用を目的から手段として、「主体的・対話的で深い学び」の授業実践に取り組んでいくこととなった。

2 研究2年目の調査・分析・結果

研究2年目からは、アクティブ・ラーニングを授業で実践することから、「アクティブ・ラーニングに関わる実態調査」を主軸に実施し、教科を国語に絞ったことによる「国語に関するアンケート」及び学級の状況を図る「学級力アンケート」の2点も学級を支える補足的なデータとして追加した。以下に、**アクティブ・ラーニングに関わる実態調査結果**(令和5年2月実施)について記載した。

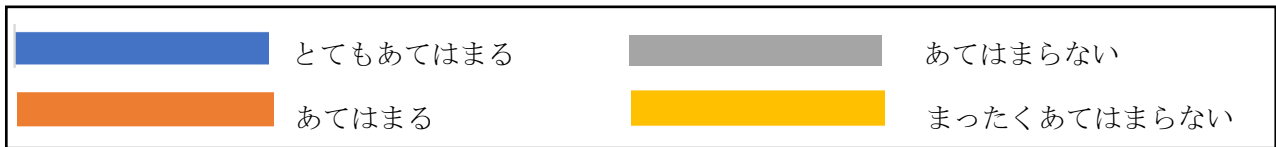
<アクティブ・ラーニングに関わる実態調査項目>

【質問項目】

- 1-(1) 1時間の学習のめあてを意識して、学習の流れを考えて学習に取り組んでいる。
- 1-(2) 興味や関心をもって、学習に取り組んでいる。
- 1-(3) 学習したことを、自分の生活と結び付けて考えている。
- 1-(4) むずかしいと感じた問題も、最後まで粘り強く取り組んでいる。
- 1-(5) 授業で新しく学んだことやもっと学習したいことを振り返りに書き、次の学習につなげようとしている。
- 2-(1) 私は、自分の考えをみんなの前で発表している。
- 2-(2) 友達の考えと自分の考えをくらべながら、学習を進めている。
- 2-(3) 友達に考えを伝えるとき、必要な方法(言葉や絵、式、身体表現、音など)を選び、相手に伝えるようにしている。
- 2-(4) ノートやICTを活用して友達と交流し、理解したことや考えたことを分かりやすく整理している。
- 2-(5) 対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。
- 2-(6) 問題や課題を解決するとき、先生や友達と一緒に考えて学習を進めている。
- 2-(7) よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている。
- 3-(1) 読み取ったことや調べて分かったことを、自分の考えと結び付けている。
- 3-(2) 前に学習したことと、新たに学習したことを関連付けて考えている。
- 3-(3) 授業を通して自分ができるようになったことを理解している。
- 3-(4) 必要な情報を取り入れて、自分の考えを創り上げている。
- 3-(5) 単元の中で、新たな課題を見つけ、解決しながら学習を進めている。

「アクティブ・ラーニングに関わる実態調査」では、主体的・対話的・深い学びの3つの内容を調査する質問で構成されている。3つに分けて調査する目的は、総合的に児童の「学び方」を広く把握することである。

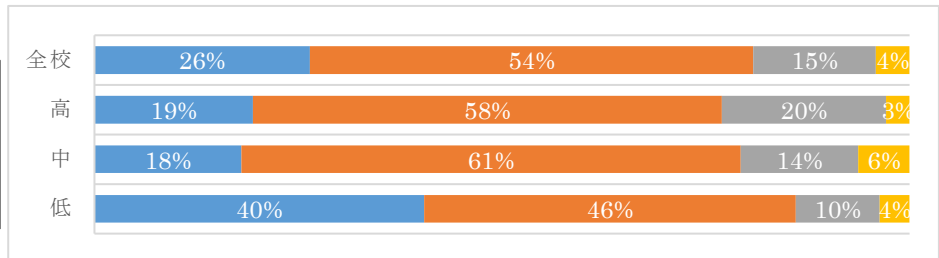
分析結果を基に、3年目は、本校として解決すべき統一課題を捉え、アクティブ・ラーニングを生かしながら、焦点を絞った授業研究につなげることを意図した。



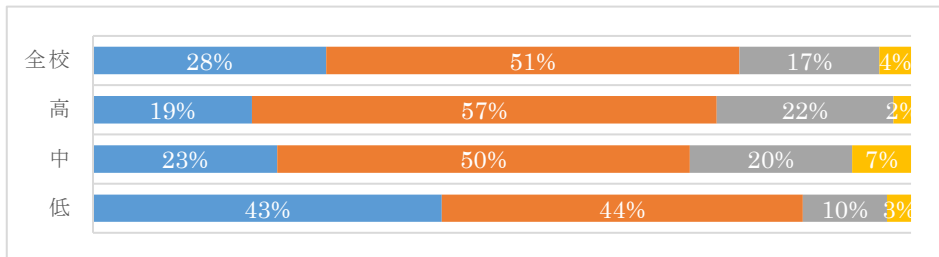
(1) 主体的に取り組む態度 【項目番号 1 - (1) ~ 1 - (5)】

<結果>

1 - (3)
学習したことを、自分の生活と結び付けて考えている。



1 - (5)
授業で新しく学んだことやもっと学習したいことを振り返りに書き、次の学習につなげようとしている。



<考察>

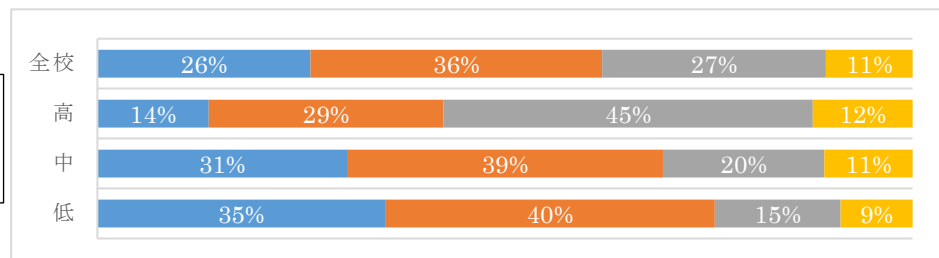
「主体的に取り組む態度」の調査項目は、全体的に高学年より低学年の方が、どの項目も肯定的な回答が多かった。めあてを意識し、興味をもって学習に取り組んでいる様子が伺えた。授業の導入でめあてを意識させ、「学ぶ必要感」をもたせた授業を行ってきた成果であった。

この調査項目の中で数値が低かったものは、1 - (3)「学習したことを、自分の生活と結び付けて考えている。」と1 - (5)「新しく学んだことやもっと知りたいことを振り返りに書き、次の学習につなげようとしている。」であった。振り返りの視点を浸透させ、教師側で意図的に限定したり、児童に委ねたりしながら、児童が振り返りに取り組みやすいよう工夫する必要がある。また、国語科という一つの教科に偏ることなく、全教科との繋がりも意識させ、教科横断的に学習したことを生かせるようにすることも必要である。さらに、振り返りから次時以降の学習へ児童が積極的に臨めるよう、教師の言葉掛けの重要性も見えてきた。

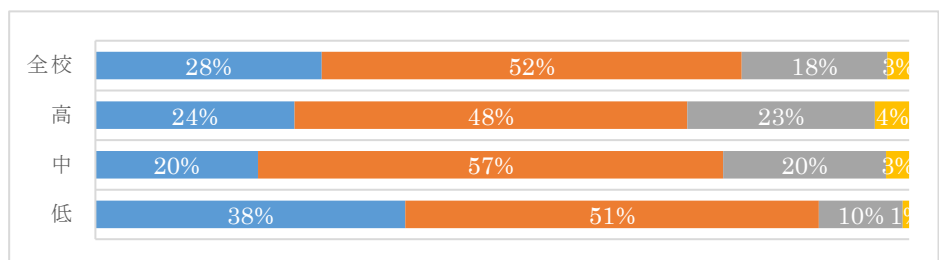
(2) 対話的な学習 【項目番号 2 - (1) ~ 2 - (7)】

<結果>

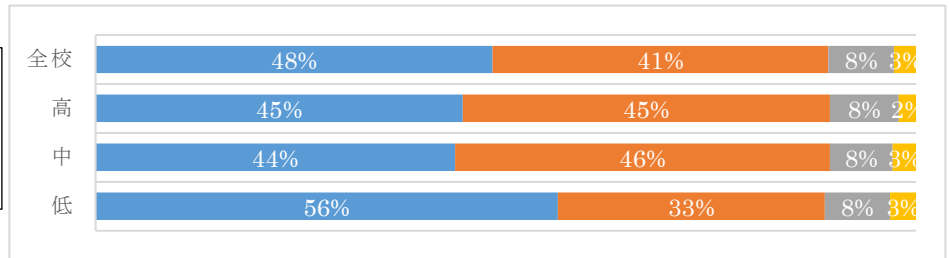
2 - (1)
私は、自分の考えをみんなの前で発表している。



2 - (5)
対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。



2 - (7)
よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている。



<考察>

2 - (1)「自分の考えをみんなの前で発表している。」の項目は、1年目の実態調査から引き続き調査している項目であり、本校の課題の一つである。結果を見ると、高学年の否定的回答が顕著であった。学年の発達段階にもよるが、発表の方法についても検討する余地がある。ICTの活用によって、児童一人一人が自分の考えを発表できる場の設定を模索中であるが、従来の挙手、指名、発表という発表の形式においては、本校児童の苦手意識が現れている。

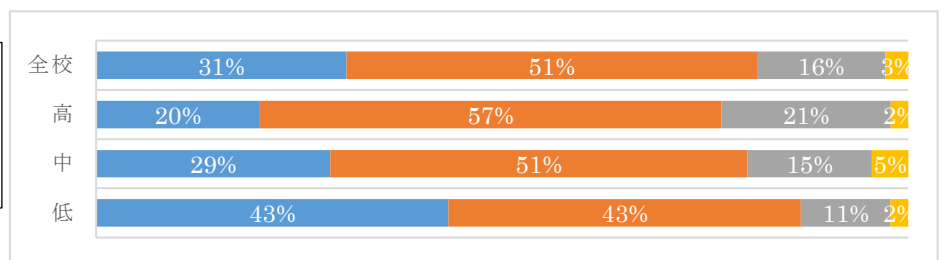
2 - (5)「対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。」の項目は、低学年では約80%が肯定的回答であるが、学年が上がるにつれ否定的な回答が増えている。このことは、学習の難易度が上がっていく高学年の方が、学習の定着や深まり、納得感に自信をもてなくなってきているように思われる。教師が「学ぶ必要感」のある授業を提供すると共に、児童自らも「何のための学習なのか」「何を解決すべきなのか」「自分には何が足りないのか」「どのように学びを進めていけばよいのか」と、自分自身に「問い」をもち続けるアクティブ・ラーニングをさらに進める必要がある。また、対話から友達のを聞き自分の考えに取り入れ、自分の考えを構築・形成するために、資料を活用することの意味を着実に理解させられるよう、授業で意図的に資料活用の時間を組み入れていく必要がある。

2 - (7)「よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている。」の項目は、友達との交流で得た情報を取捨選択し、必要なことを整理することに苦手意識を感じている児童が多い。しかし、対話を通して友達の意見を取り入れる大切さには気付いている。対話することの必要感、視点をもたせた交流など、必然的で意義のある対話のために、授業展開のどの場面で対話を仕組んでいくのかを研究のキーポイントとして考える必要がある。

(3) 深い学び 【項目番号 3 - (1) ~ 3 - (5)】

<結果>

3 - (5)
単元の中で、新たな課題を見つけ、解決しながら学習を進めている。



<考察>

3 - (5)「単元の中で、新たな課題を見つけ、解決しながら学習を進めている。」の項目も、学年が上がるにつれ肯定的回答が減少傾向であった。学習は、児童自らが新たな課題や問題を見付け、既習事項を用いて解決していくことで知識や技能が身に付き、思考力が深まっていく。新しく得た知識をどのように自分のものにしていけるのか、当該学年の1年間だけでなく、学年間の系統性を意識した学習の積み重ねが、学習の定着のポイントになってくる。他学年の年間指導計画にも目を通しながら、教科横断的に学習を捉えられるよう教科部会などを開き、議題として挙げていくことも必要ではないかと考える。

【研究2年目の考察のまとめ】

2年目は、ICTの活用を目的から手段へと発展させることができた。ICTを活用して、児童の考えの可視化、対話的な学習活動、指導と評価の一体化など、様々なことを意図して授業実施を積み重ねることができた。

「アクティブ・ラーニングに関する実態調査」から、対話的によって児童の学びを広げることが、少しずつ可能になってきていると感じる。しかし、深い学びへと促し、確かな学力になっていると、児童が実感するまでに至っておらず、その結果が、「対話に対して苦手意識をもっている児童が多い」という数値に現れてしまっているのかもしれない。

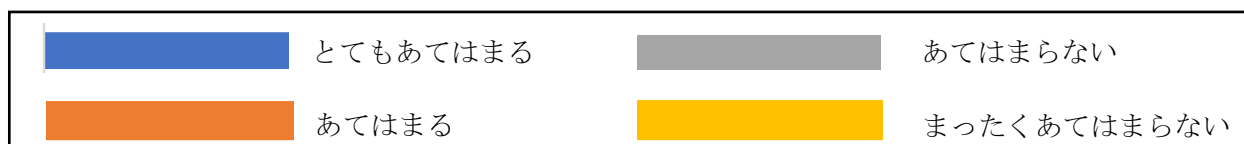
さらにアクティブ・ラーニングという学習形態のもと、教師主導ではなく、児童主体の授業展開をどのように進めていくのかという研究を、もっと突き詰めていく必要が見えてきた。

そこで、令和5年度（研究3年目）からは焦点を絞り、2-（5）「対話や資料から多様な情報を集めて、学習している」、2-（7）「よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている」の項目を本校の重点課題として授業展開を見直すこととした。

3 研究3年目の調査・分析・結果

令和4年度（研究2年目）の調査結果から「アクティブ・ラーニングに関する実態調査」項目2-（5）「対話や資料から多様な情報を集めて、学習している」、2-（7）「よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている」を本校の重点課題と捉え直し、国語科の授業に限定して授業実践に取り組んできた。課題の解決を図るべく、令和5年度5月に、前学年との系統性を意識して、学年毎に具体的な手立てを再確認した。以下に、低・中・高学年毎に協議した「手立て」「アクティブ・ラーニングに関する重点課題の調査」「国語に関するアンケート」の結果と考察を記載した。

(1) アクティブ・ラーニングに関する重点課題の結果



(ア) 低学年（1～2年生）

<具体的な手立て>

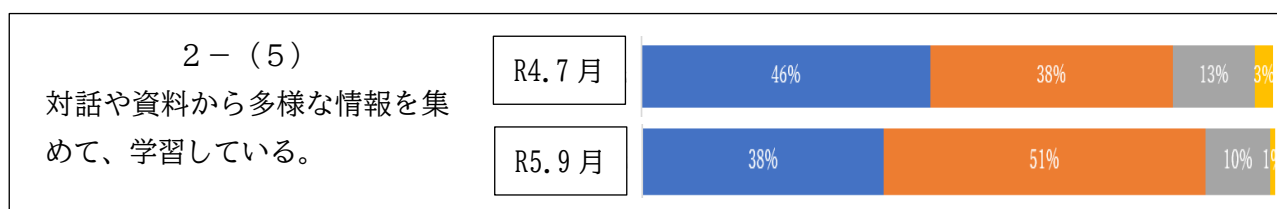
研究2年目の調査結果を踏まえ、研究3年目は、5月の時点での手立てを次のように考えた。

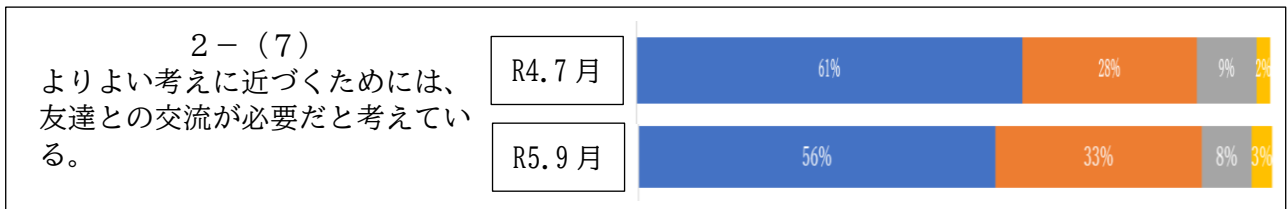
①話合いの基本的な型（話し方・聞き方）を授業の中で意識的に活用させる。

②対話場面の設定の工夫

- ・自分の考えをもたせる時間の十分な確保（自力解決の場合）
- ・対話の視点やゴールを示し、対話の必要感を引き出す。
- ・対話から自分の考えの変容につながるよう、教師の意図的な言葉掛け
- ・自分の考えに理由を付けて相手に伝え、友達の考えを聞き認める、対話の安心感の醸成
- ・対話の形態の工夫（ペア、グループ、ロイロノートなどのICTの活用、自由など）

<R4.7月と、R5.9月のアンケートの結果と比較>





<考察>

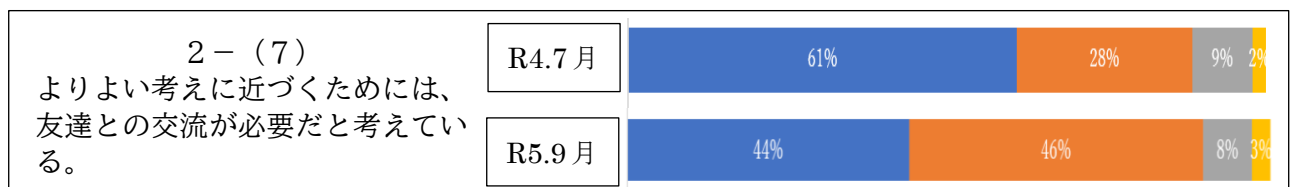
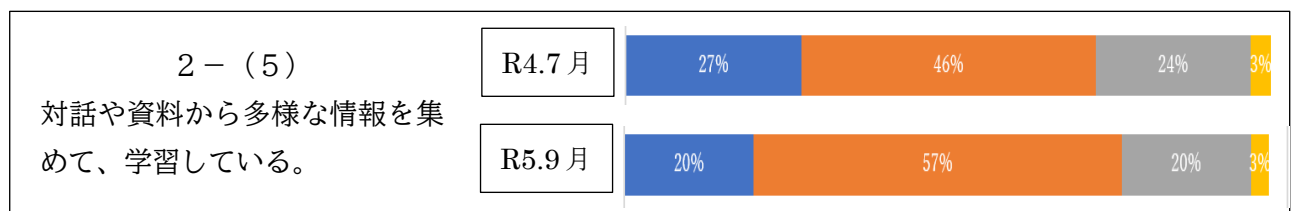
- 話し合いをするための基礎的な学習（話し方・聞き方）が身に付いてきたことにより、相手を意識して自分の考えや思いを積極的に伝えようとしていた。
- 自分の考えをもつ時間を十分に設定したことで、ねらいに対する自分の考えをもち、対話の意図を捉えた話し合いが出来るようになってきた。
- 対話の視点を与え、ゴールを明確化することで、学習に主体的に取り組む児童が増えた。
- 対話から自分の考えを整理する時間を設けることで、学習をより深めることができた。
- 対話の形態を工夫することで、「自分の考えを伝える、友達の話聞く」ことに、スムーズに取り組めるようになってきた。

(イ) 中学年（3～4年生）

<具体的な手立て>

- ①対話の機会を増やす。
 - ・家の人に聞いてもらう、ロイロノートに録音するなど、対話する機会を増やす。
- ②相手意識をもたせ、必要感のある対話の促進
 - ・単元導入時に必要感をもたせる工夫と、活動の見通しのもたせ方
 - ・自分の考えと友達のととの比較、修正の仕方の指導
 - ・活動内容に応じたためあて、振り返りの視点の指導
- ③自信をもって発表ができるようするための、教師のプラスの言葉掛け
 - ・机間指導などで個別に考えを見取り、児童の考えを称賛

<R4.7月と、R5.9月のアンケートの結果と比較>



<考察>

- A評価である児童のノートや考えを、ロイロノートに共有することで、考えの視覚化につながり、自分の考えと友達のとを比較検討できるようになってきた。
- 他教科とのつながりや、既習事項との差異を明らかにすることで、日常や今後活用できる学習であることを意識させ、主体的に学べるようになった児童が増えてきた。

○活動の視点（話し合い、共有、発表など）や人数を工夫して活動することにより、自分の考えをもてるようになってきた。

○考える時間を確保することで、自分の考えをもってから活動ができるようになってきた。

(ウ) 高学年（5～6年生）

<具体的な手立て>

①自分の考えが伝わる話し方・書き方の工夫

- ・教師が内容の構成や手順を例示する。
- ・手本となる児童の事例を紹介する。

②自信をもって発表ができるようになるための工夫

- ・課題の確認、共有、見通し、対話の意図、振り返りの姿などを提示し、机間指導で児童にプラス思考を促していく。

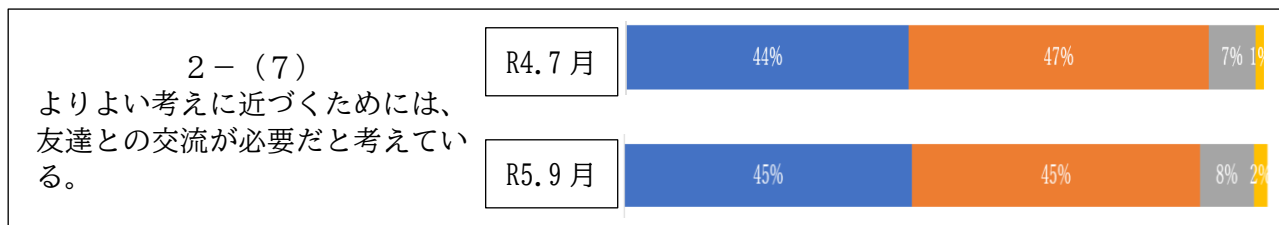
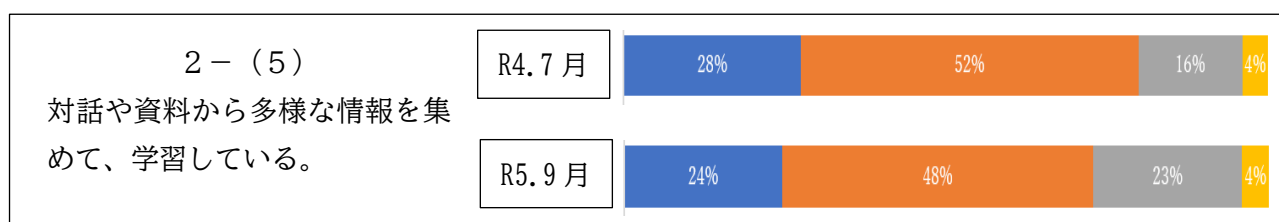
③形態の工夫、発表の機会を増やす

- ・ペア、小グループ、全体など、従来型の基本的な発表の手順に立ち返る指導

④必要感のある対話の工夫

- ・考えの同質や異質など、グループ編成を細かく行い、スムーズな対話の促進を図る。

<R4.7月と、R5.9月のアンケートの結果と比較>



<考察>

○教科書だけでなく、教師が分かりやすい事例を提示することで、取り組む時間が早くなり、考える時間や対話の時間を増やすことに繋がった。

○目的や意図に応じて自分の考えが書けるように、教師が事例を提示した。毎時間の始めに全員で課題を確認、共有、見通しをもって活動に取り組むことで、苦手な児童の意識に変容が見られた。

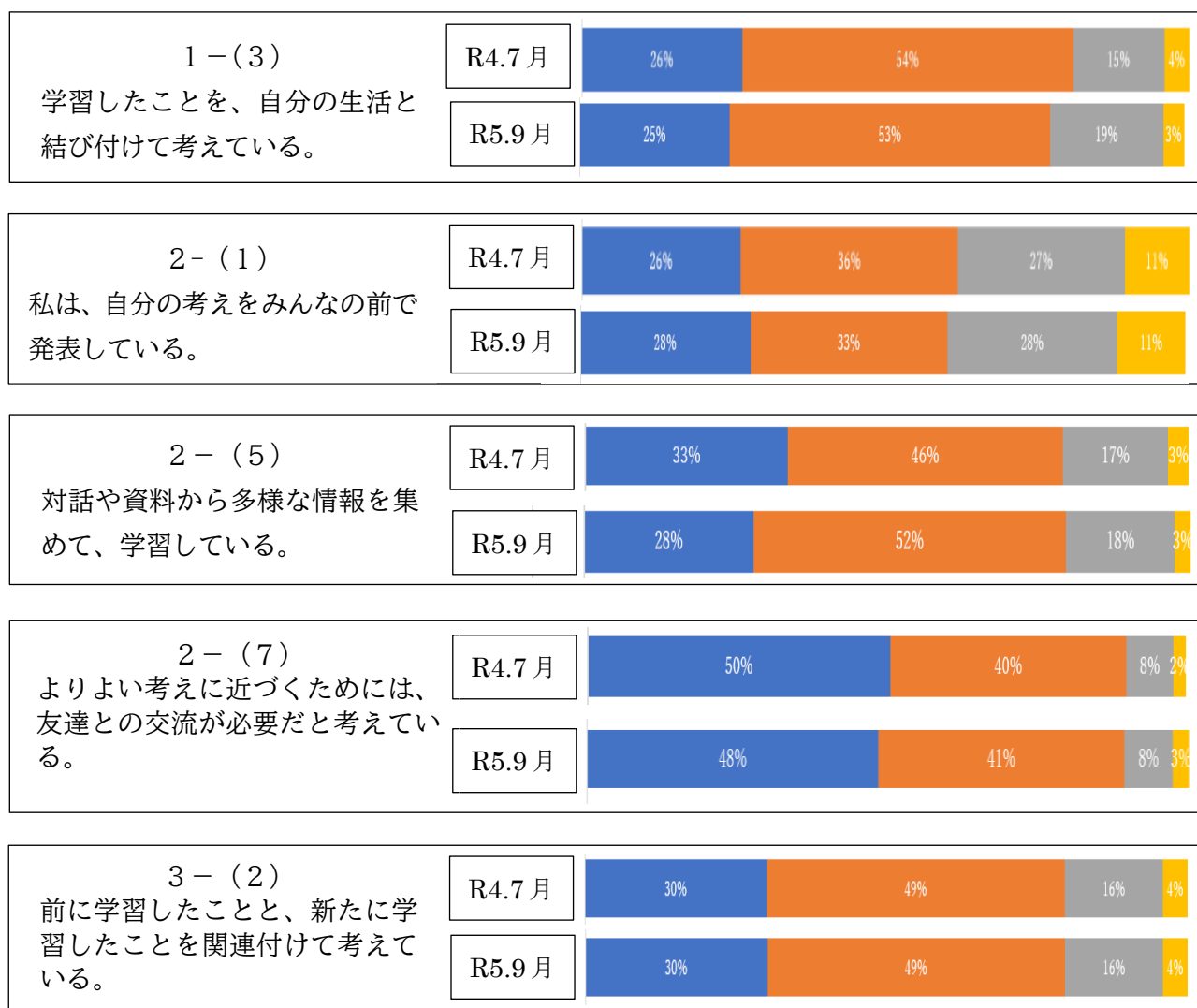
○小グループで発表することで自信につながり、全体の前でも発表する意欲につながった。

○教師が机間指導で見つけたよい考えを、全体で共有することで、他の意見を聞いてみたいと思える児童が増えてきた。

○同じ課題をもった児童同士が、必要な情報をやりとりするための手立てとして、効果的な対話活動につながっていた。

(エ) 学校全体

学校全体の比較では、アクティブ・ラーニングに関する実態調査の重点課題の他に、本校として焦点を当ててきた項目の結果と考察についてもまとめた。



<考察>

- 1-(3)「学習したことを、自分の生活と結び付けて考えている」の項目についての肯定的回答がどの学年でも減少した。児童が学習の内容を実生活に反映したり、どう活用したらよいか分からなかったりすることが考えられる。しかし、児童が真剣に学習と実生活を結び付けようとする意識が高まってきたことによるものだとも考えられる。
- 2-(1)「私は、自分の考えをみんなの前で発表している。」の項目については、昨年度同様、否定的回答が多く見られた。本校の児童の特徴が顕著に表れている。発表することについての意義を児童と共に創り上げていく必要があると考える。
- 2-(5)「対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。」の項目については、中学年が顕著に伸びており、低・高学年においても肯定的回答が増加した。2-(7)「よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている。」の項目と関連付けて、よりよい考えのために、対話が必要であると考え、必要感を持たせるために授業展開の工夫を講じてきた結果である。
- 3-(2)「前に学習したことと、新たに学習したことを関連付けて考えている。」の項目が、どの学年でも否定的回答が多く見られた。上記1-(3)の項目とも関連しているため、実生活にどのように結び付いているのかを視野に入れて、指導していく必要がある。

【「アクティブ・ラーニングに関する実態調査」の結果・考察のまとめ】

対話の仕方が身に付き、友達の考えや資料の情報から自分の考えに生かそうとする児童が増加してきている。また、対話の内容や目的を意識させ、必要感の伴った対話を意識してきたことから、児童の主体性が向上し、考えの広まりや深まりを実感できた児童が一部見られた。

一方で、学習して得た知識や考えを実生活に生かしたり、どう活用したらよいか分からなかったりする児童は多い。今後は学年や教科との関連についても触れながら、学習を系統立てていく必要がある。さらに、基礎的な話し合いは身に付いてきたことから、さらに内容を深めるための対話の質を向上させ、対話を上手に活用する方法を研究の続きとしていけたらと考えている。

(2) 国語に関するアンケート調査（令和4年2月と令和5年9月の比較）

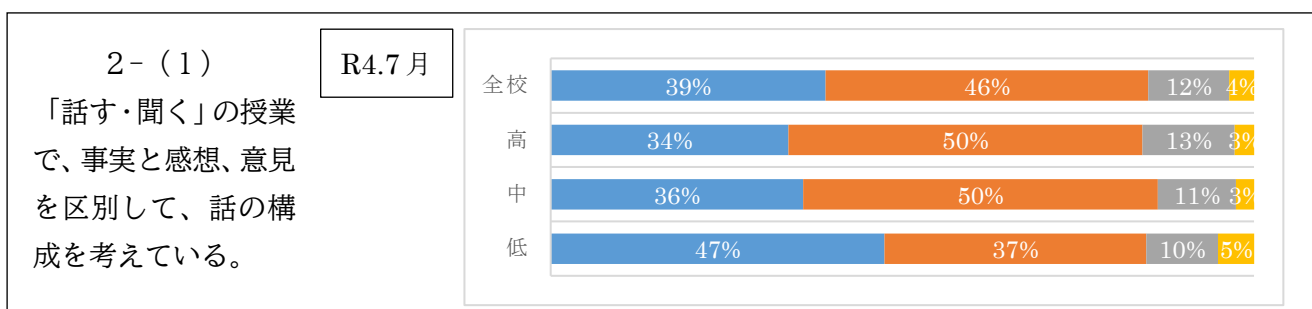
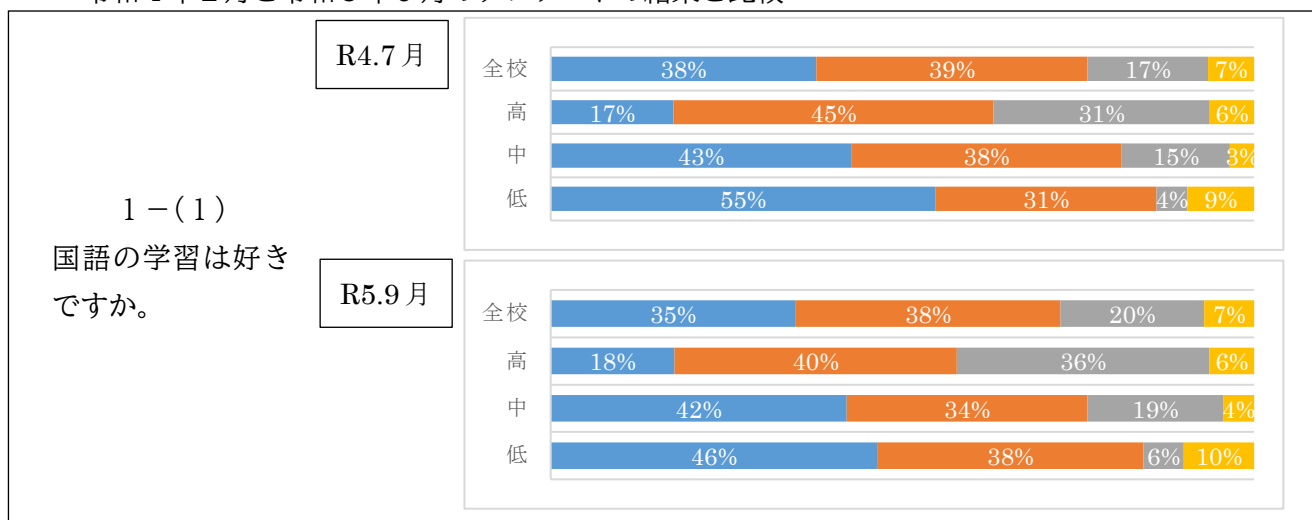
<国語に関するアンケート項目>

【質問項目】

- 1 - (1) 国語の学習は好きですか。
- 1 - (2) 1 - (1) で答えた理由を教えてください。
- 1 - (3) 国語の学習は得意ですか。
- 1 - (4) 1 - (3) で答えた理由を教えてください。
- 2 - (1) 「話す・聞く」の授業で、事実と感想、意見を区別して、話の構成を考えている。
- 2 - (2) 「話す・聞く」の授業で、資料を活用するなど、自分の考えが伝わるように話し方を工夫している。
- 2 - (3) 相手の話を聞き、それと比べながら、自分の意見をまとめている。
- 3 - (1) 自分の考えが伝わるように、目的や意図に応じて、文章を書いている。
- 3 - (2) 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、よりよい文章に直している。
- 4 - (1) 説明的な文章では、文章全体の構成を捉えて、要旨（文章の最も重要な部分）を理解している。
- 4 - (2) 説明的な文章では、必要な情報を見付けたり、意見や考えの進め方について、考えたりしている。
- 5 - (1) 文学的な文章では、登場人物の相互関係や心情などを捉えている。
- 5 - (2) 文学的な文章では、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。

「国語に関するアンケート」では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3つの領域及び、「説明文」「物語文」に対する読解に関する質問など、国語科に対する児童の実態を詳細に捉える質問項目になっている。各学級では、その結果も参考に児童理解へと繋げ、日々の授業実践に役立てるようにした。

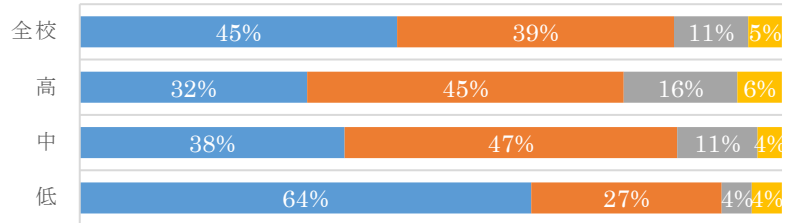
<令和4年2月と令和5年9月のアンケートの結果と比較>



2 - (1)

「話す・聞く」の授業で、事実と感想、意見を区別して、話の構成を考えている。

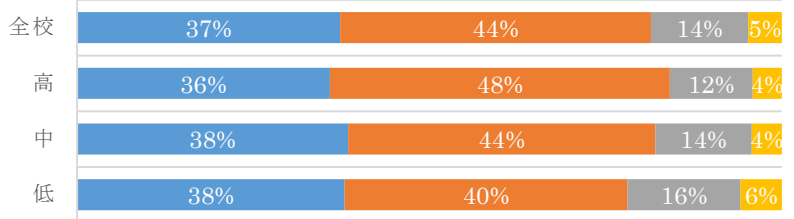
R5.9月



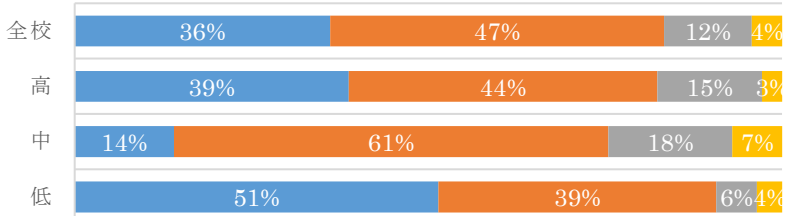
2 - (2)

「話す・聞く」の授業で、資料を活用するなど、自分の考えが伝わるように話し方を工夫している。

R4.7月



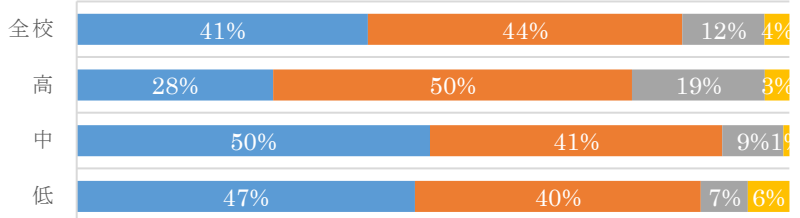
R5.9月



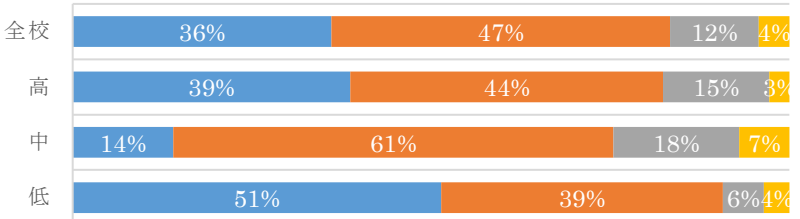
2 - (3)

相手の話を聞き、それと比べながら、自分の意見をまとめている。

R4.7月



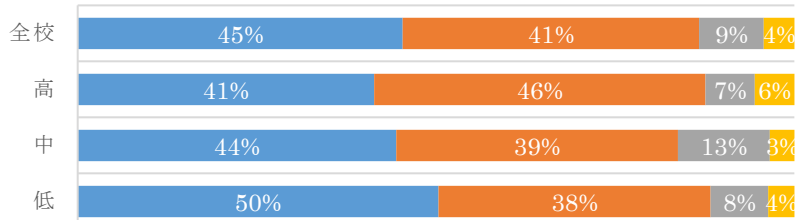
R5.9月

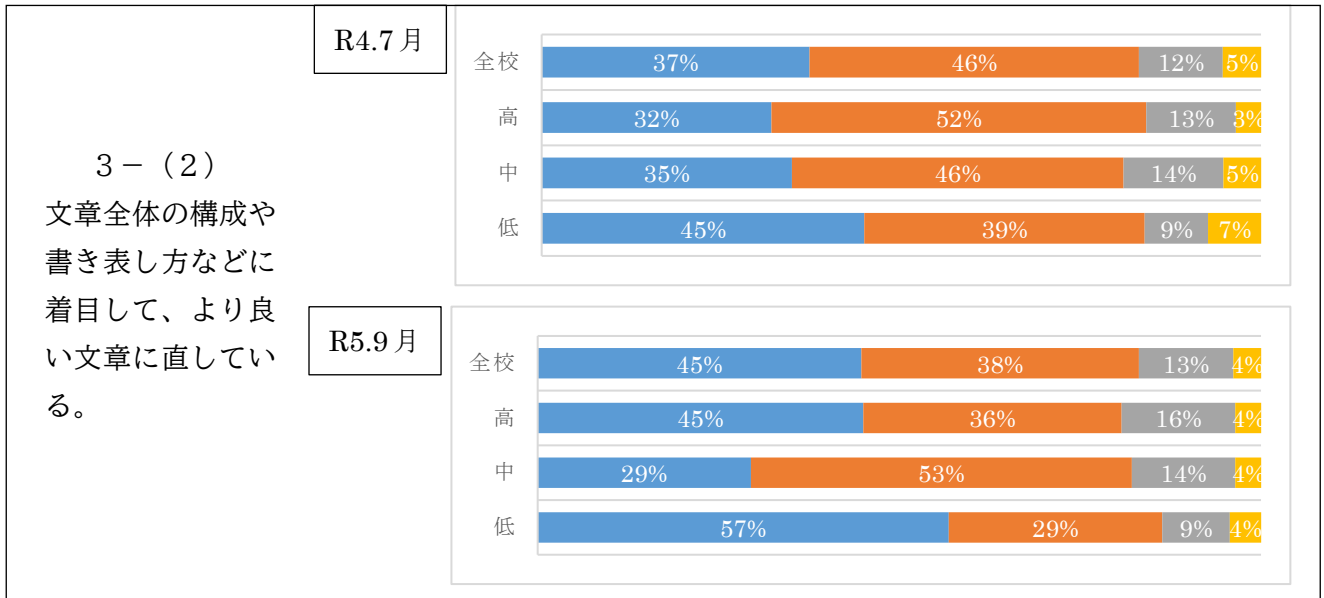
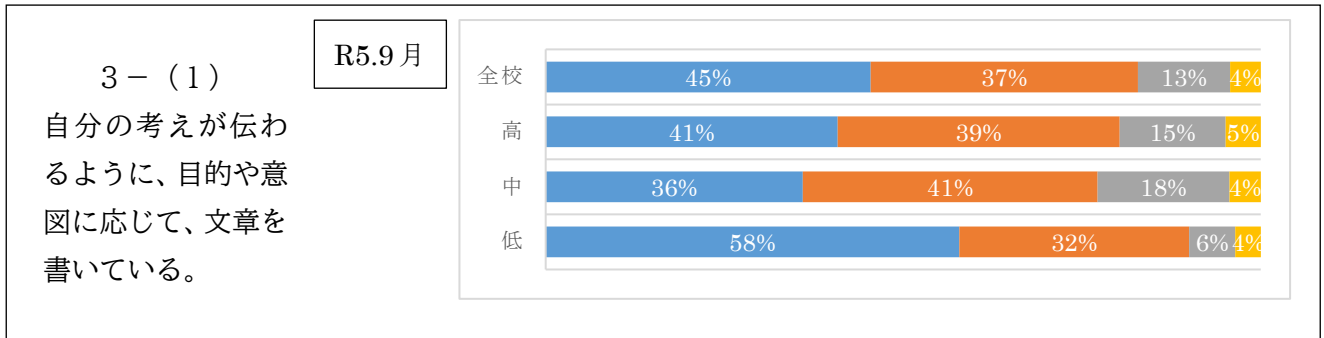


3 - (1)

自分の考えが伝わるように、目的や意図に応じて、文章を書いている。

R4.7月





<考察>

- ・ 1 - (1)「国語の学習は好きですか。」のアンケート項目は、令和5年9月に実施した調査結果が前年の結果をいずれも下回った。また、高学年になるほど否定的回答が多くなっていた。学年が上がるにつれ、学習内容が難しくなることとも関連していると思われる。
- ・ 2 - (1) (2) (3) のアンケート項目は、本校で取り組んできた対話的活動に大きく関わる内容である。2 - (3)「相手の話を聞き、それと比べながら、自分の意見をまとめている。」の項目が、学校全体で肯定的回答が増加した。アクティブ・ラーニングを生かし、対話的な学習に焦点を当て、対話する視点や意図を児童に伝え続けてきた授業の成果であると考えられる。
- ・ 3 - (1) (2) は、県や全国の学力学習状況調査などの結果から、本校児童が苦手としている「書くこと」における領域について問う項目である。数値として大きな変化は見られていない。しかし、説明文や文学的な文章の読み取りから経験値を高め、書く相手を明確にし、目的や意図に応じて書き方の工夫を重ねていくことに対する児童の意識の高まりが見られる。
- ・ 「アクティブ・ラーニング」の学習形態、ICTの活用などにより、児童が国語科の学習に、主体的に取り組み、基礎学力の定着、対話を通じた自分の考えの構築、相手に伝わる話し方の工夫、内容の構成などを向上させようとする、児童の学習に対する意識は、この3年間で向上してきた。

【「国語に関するアンケート調査」のまとめ】

研究2年目より、国語科に教科を限定しアクティブ・ラーニングを手立てとして研究を進めてきた。実態調査やアンケートに対する児童の回答が、初期の段階から8割を超えている項目が多く、期間を離して調査を実施しても、有意義な結果を得ることは出来なかった。しかし、児童の自由記述や教師の振り返りから判断しても、アクティブ・ラーニングを手立てとして、ICTを活用することによって、主体的・対話的で深い学びにつながる国語の授業の道筋が見えてきている。

4 学級力アンケート

「学級の状態」を数値化し、アクティブ・ラーニングの授業が成立する学級に近づいているかを判断するための調査である。実施後は、結果を学級に掲示し、常に児童と教師が客観的に把握できることを意図した。

全15項目の質問項目の中に、目標に向かう継続力や団結力、授業中の望ましい態度、係や当番などの業務遂行力、友達との協調性など、幅広く学級の状態を把握できるようになっている。この調査を研究2年目に2回、研究3年目に2回の合計4回実施した。学級の中の課題や伸びを把握し、日々の学校生活の中で意識して取り組めるようにした。

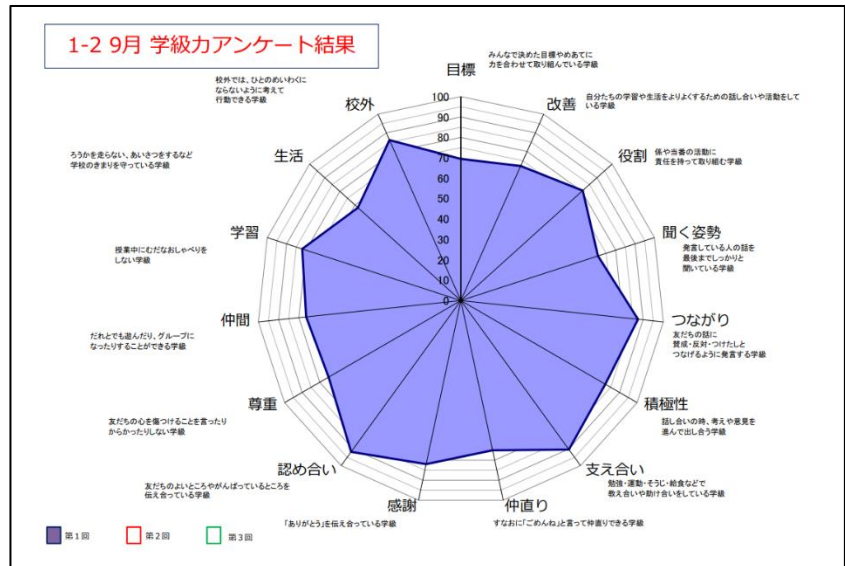
全学級の結果を載せることはできないが、先行授業及び研究授業の学級の結果について掲載する。

学級力アンケート	
4:とてもあてはまる 3:少しあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:まったくあてはまらない	
目標をやりとげる力	
① 目標	みんなで決めた目標やめあてに力を合わせてとりこんでいる学級です。
② 改善	自分たちの学習や生活をよくするための話し合いや活動をしている学級です。
③ 役割	係や当番の活動に責任を持ってとりこむ学級です。
話をつなげる力	
④ 聞く姿勢	発言している人の話を最後までしっかりと聞いている学級です。
⑤ つながり	友達の話に賛成・反対・つけたし、つなげるように発言している学級です。
⑥ 積極性	話し合いの時、考えや意見を進んで出し合う学級です。
友だちを支える力	
⑦ 支え合い	勉強・運動・そうじ・給食などで、教え合いや助け合いをしている学級です。
⑧ 仲直り	すなおに「ごめんね」と言って、仲直りができる学級です。
⑨ 感謝	「ありがとう」を伝え合っている学級です。
安心を生む力	
⑩ 認め合い	友だちのよいところやがんばっているところを伝え合っている学級です。
⑪ 尊重	友だちの心を傷つけることを言ったり、からかったりしない学級です。
⑫ 仲間	だれとでも遊んだり、グループになったりすることができる学級です。
まもりを守る力	
⑬ 学習	授業中にむだなおしゃべりをしない学級です。
⑭ 生活	ろうかを走らない、あいさつをするなど、学校のまもりを守っている学級です。
⑮ 郊外	校外ではひとのめいわくにならないように考えて行動できる学級です。

<結果>

1年生においては、2学期に第1回目を実施した。15項目中8項目で8割を達成している。6月末に行った先行授業でも、児童の学習意欲は高く、一人一人が自分の考えをもって対話に臨んでいる姿を見ることができた。「友達との交流が好きな児童が多く、仲間意識をもって、全ての項目を伸ばそうと意欲的になっている。」と担任は捉えており、学級力の向上が見られる。

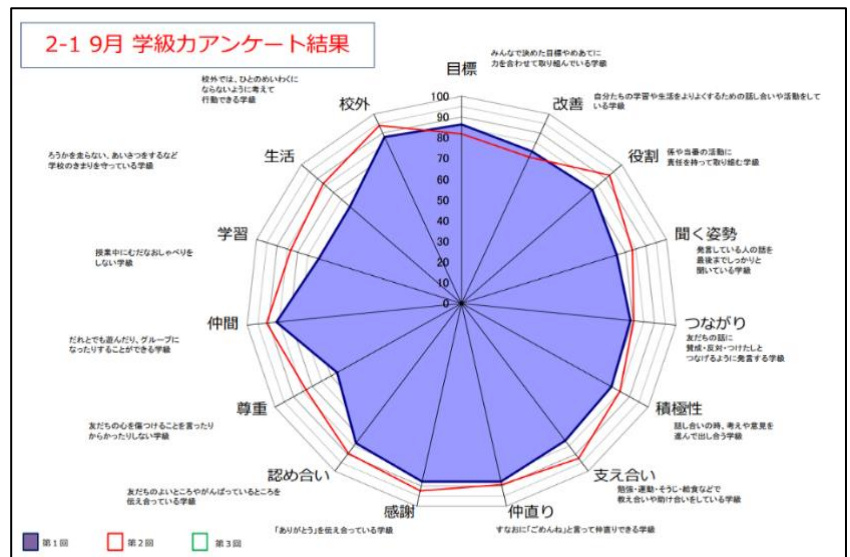
【低学年 1年2組】



【低学年 2年1組】

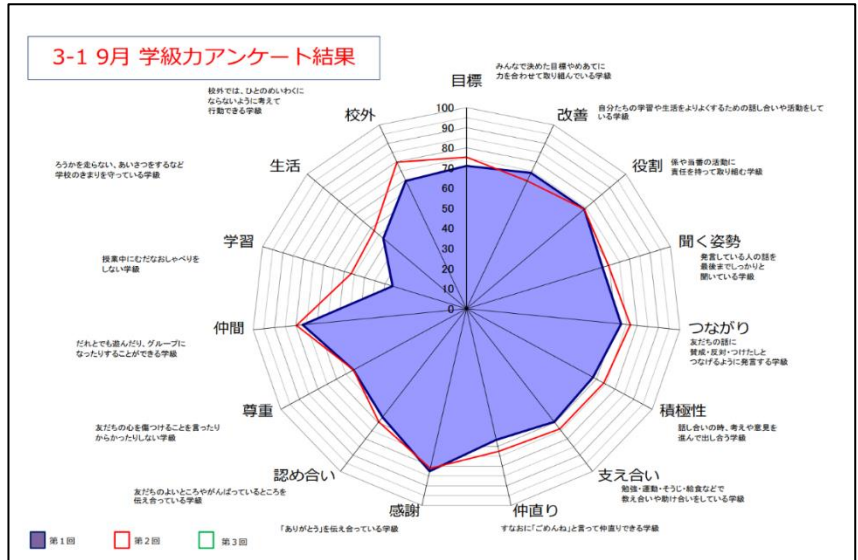
5月に実施した時点でも、15項目中12項目で8割近くの高水準である。2年1組の学級としては、項目「尊重」「学習」「生活」に課題が見られることが分かる。

9月の実施結果では、概ね8割を達成しており、課題であった3つの項目においてもそれぞれ向上し、学級の課題に対して、児童と教師が意識して取り組んだ成果といえる。



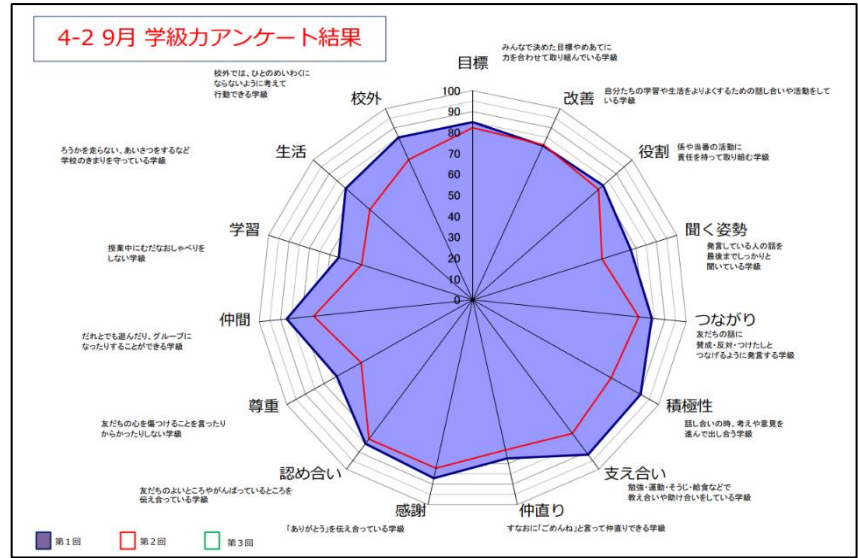
【中学年 3年1組】

5月に実施した時点では、平均値が7割前後で、特に平均を下げているのは、学習であった。9月実施の時点では、学習の数値が伸び、グラフの形がバランスのよい方向へと変化してきている。実際に学級の様態を見ると、静かに落ち着いて学習に臨む態度が多く見られるようになり、授業に即した話し合いを続けることが出来るようになってきている。



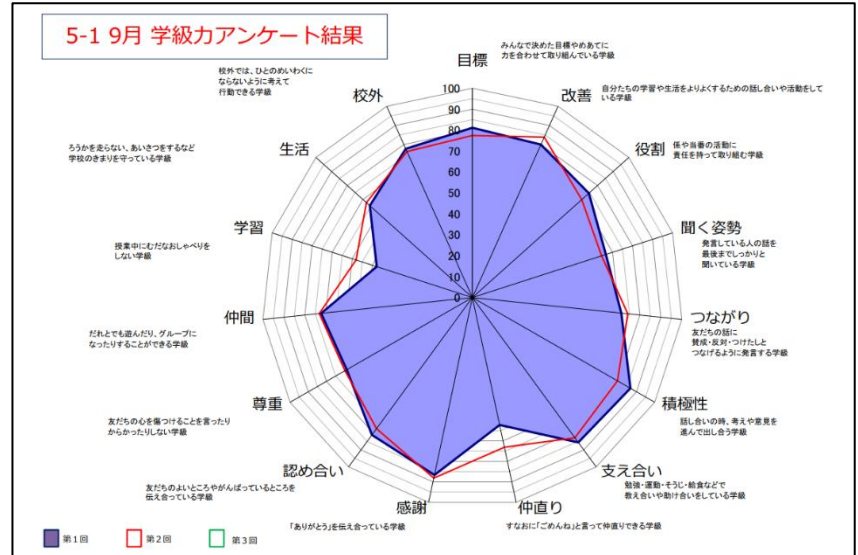
【中学年 4年2組】

5月に実施した時点では、15項目中12項目で7割近い数値である。9月実施では、全体的に数値が下がってしまったが、発達段階が進み、自分たちの状況をより客観的に捉えられるようになってきたともいえる。学級担任も、「元気な学級であるが、けんかが減り、落ち着いて学習する雰囲気が出来てきている」と、肯定的な捉え方をしている。

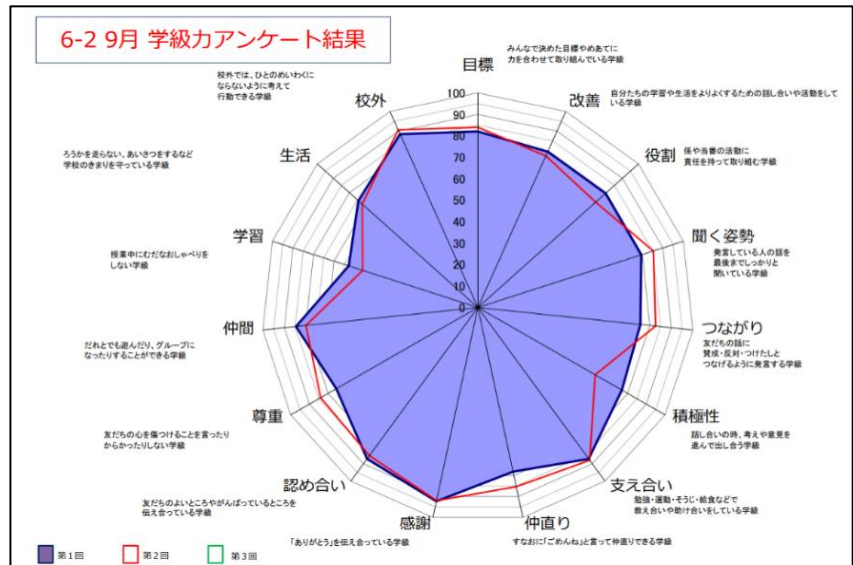


【高学年 5年1組】

5月と9月のアンケート結果において、全体的な変化は少ないが、担任が「気付き」「支え合い」「改善」など、キーワードを常に児童に投げかけ、児童一人一人が考え「考動」することを促している。特に授業の中で、友達同士の学び合いや関わり合いを大切にした学級経営を行っている。その結果が、「学習」「仲直り」「改善」の項目の伸びにつながっている。



5年1組と同様に、5月と9月の結果における全体的な変化は少ない。しかし、担任が普段から「ありがとう」「ごめんなさい」と、温かい言葉を掛けることの大切さを学級に伝えていることから、友達との「つながり」や「仲直り」の項目が伸びている。さらに、「学習」の数値は下がってしまったが、信頼関係の深まりから、「聞く姿勢」の数値が上昇してきている。



<考察>

とりわけ、1～3年生の数値の伸びが顕著であり、4～6年生は、数値が下がる傾向が見られた。この要因は2つあると考えている。

1つ目の要因として、発達段階による差である。発達段階が低ければ低いほど、児童が自分自身のことや学級全体のことを客観的に捉える力は乏しい。4年生以上から数値が下がる傾向にあるのは、発達段階が上がっていくことで、児童自身と学級の状況をより客観的に捉えられるようになってきた証であると言える。さらに多角的・多面的に考え、見方を変えると、発達の段階によって、児童の学級に対する捉え方が大きく異なるということである。また、毎日一緒に過ごしていると捉えづらいが、同じ学級でも1年間の中で児童一人一人はそれぞれ成長や変化を遂げており、絶えず学級の状態は変化しているということである。そのことを踏まえ、教師は、絶えず学級の状況を客観的に捉える必要がある。

2つ目の要因としては、教師の学級に対する関わり方である。アクティブ・ラーニングの授業を成立させるためには、児童と共に温かい支持的風土のある学級を作り上げようと、どれだけ努力するかにかかっている。加えて、教師の個性も学級づくりに反映されている。客観的な数値とはいえないが、各学級の担任の大切にしている考え方や学級への思いによって、児童の反応は大きく変わり、レーダーチャートの形にも大きな影響を与えていた。

一方で、矛盾すると思われるかもしれないが、レーダーチャートの円が小さかったり、形が歪だったりしても、教師としての指導力が不足しているということではない。確かに、1回目の調査と2回目の調査を比較すると、下がってしまう項目も無いわけではないが、意識して取り組んだ項目の数値は確実に上がっていた。つまり、レーダーチャートに現れた形と学級の状態には、相関関係が存在しており、教師の学級へのアプローチの仕方によって、学級の状態は大きく変化するということである。

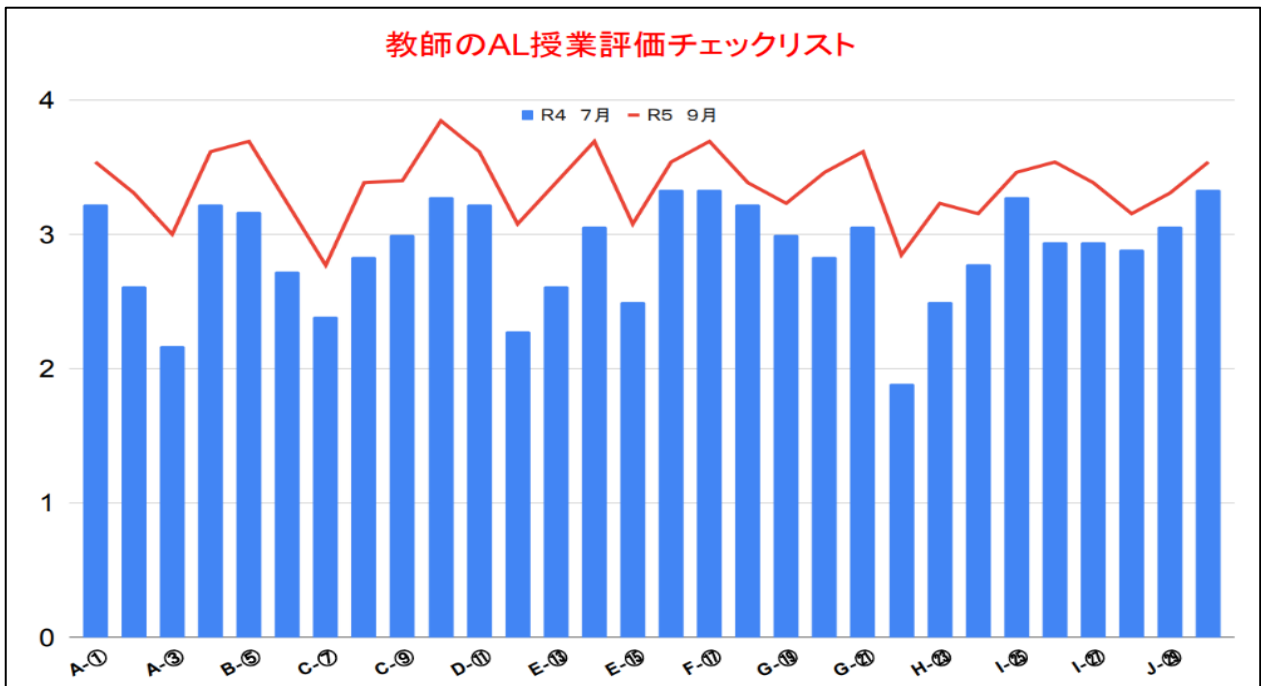
以上のことから、学級力を向上させ望ましい学級づくりを目指す為の視点を3つにまとめると、①学級で身に付けるべき15の項目の一つ一つの力を伸ばそうと、児童と教師が共通の認識を図っていくこと。②その学級の課題を絶えず客観的に捉え、課題意識をもって取り組んで進むこと。③教師が思いをもって児童と接し、児童と共に学級を築き上げていく継続力と忍耐力を養っていくこととなる。この3点を実践することで、アクティブ・ラーニングでの学習を成立させ、「主体的・対話的で深い学び」に繋がっていくのではないかと考える。

5 教師の実態調査

アクティブ・ラーニングの学びを成立させるために、教師が授業実践の中で意識する視点について明記した。結果は、振り返りの役割を担うと共に、授業の羅針盤としても活用した。

<p>A 目標・課題設定</p> <p>① 思考力・判断力・表現力の育成に重点をおいて授業設計をしている。</p> <p>② 問題解決や創作表現のための学習課題を児童生徒に設定させている。</p> <p>③ 多様な汎用的能力の評価基準を明示している。</p> <p>B 活用・探求問題の設定</p> <p>④ 基礎的・基本的な知識・技能を活用する場面を設定している。</p> <p>⑤ 児童生徒が主体的・協働的に取り組む学習問題を設定している。</p> <p>⑥ 意外性がある問題や協力して解決できる問題を設定している。</p> <p>C 教材作成</p> <p>⑦ 教科書や資料集にはないオリジナル教材を作成している。</p> <p>⑧ 新聞記事、統計資料、地図、写真、図表など多様な資料を用いている。</p> <p>⑨ 社会生活や日常生活の場面を想定して、課題解決を行わせている。</p> <p>D 活動構成</p> <p>⑩ 自力解決と小集団での協働解決、一斉検証を組み合わせている。</p> <p>⑪ 思考や対話、発表や表現、作品制作など多様な活動を設定している。</p> <p>⑫ 問題解決や創作表現の学習プロセスを、児童生徒に設定させている。</p> <p>E グループワークの活性化</p> <p>⑬ グループで資料を読み取り、意見を出し合いまとめて発表させている。</p> <p>⑭ グループ内の多様な意見を交流させて、思考を深めさせている。</p> <p>⑮ グループ内での相互評価を通して、学習を改善させている。</p>	<p>F 学習環境の構成</p> <p>⑯ ICT活用や図書館利用を通して、主体的な情報活用を促している。</p> <p>⑰ 認め合い励まし合う学習関係の構築に配慮している。</p> <p>⑱ 特別な支援を要する児童生徒への合理的配慮を行っている。</p> <p>G 活用意識の明確化</p> <p>⑲ 活用を図る学習活動に取り組む意義を、児童生徒に意識させている。</p> <p>⑳ 思考や対話、表現の「モデル」を掲示して可視化している。</p> <p>㉑ 学習プロセスの見通しを持たせたり、振り返りをさせたりしている。</p> <p>H 評価の工夫</p> <p>㉒ ルーブリックを作成して、作品やパフォーマンスを評価している。</p> <p>㉓ 活用型学力が身に付いたかどうか自己評価や相互評価をさせている。</p> <p>㉔ 児童生徒一人ひとりの汎用的能力の達成状況について評価している。</p> <p>I ノート・ワークシートの工夫</p> <p>㉕ 記述式のワークシートを工夫して利用している。</p> <p>㉖ 資料や情報を比較して、自分の意見を書くよう構成を工夫している。</p> <p>㉗ 思考や表現の「モデル」を児童生徒が活用できる工夫をしている。</p> <p>J 学習意欲や達成感の喚起</p> <p>㉘ 問題解決や創作表現の喜びや達成感を感じさせる工夫がある。</p> <p>㉙ ヒントカードや「モデル」の掲示などで、難易度を調節している。</p> <p>㉚ 自分なりの考え方や個性的な表現を奨励して、学習意欲を高めている。</p>
---	--

<結果>



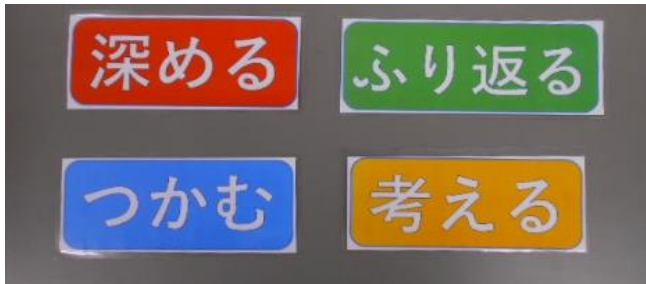
<考察>

アクティブ・ラーニング導入直後の令和4年7月から令和5年9月までの1年間で、国語科だけでなく、他の教科でもアクティブ・ラーニングを生かした授業実践に取り組む教師が増えた。また、平均値の底上げや数値の低い項目の大きな伸びが見られ、授業に対する教師の意識が変化したことが分かる。これは、アクティブ・ラーニングを学び直す中で、その学習形態の特徴を捉え、長所を生かしながら児童の主体性を引出し、対話的な活動によって、児童のコミュニケーション力やプレゼンテーション力を育もうと教師が努力した結果であるといえる。

環境部

研究主題に迫る手立ての一つとして、学習環境をハード面とソフト面の視点をもって以下のように整備した。

(1) 学習進行カードの作成



○学習進行カードの目的

本校の学力向上プランに基づき、全教員が共通認識のもと、同一の授業展開を図れるように意図したもの。

児童が1単位時間の見通しをもって学習に臨めるようにする、ユニバーサルデザインのねらいも含む。

(2) 階段掲示（階段を使う学年に合わせて、言語活動の充実を促す言葉）



○語彙を増やす階段掲示の目的

階段を利用する該当学年の教科書巻末に載っている「言葉の宝箱」を参考に、階段に掲示。児童の語彙を増やし、言語活動の充実を図る取組。

(3) 児童向けICT活用攻略方法（職員室前廊下掲示）

○ロイノートに画像をいれるやりかた

- ほしい画像を検索
- 赤いボタンを同時に押す
- まるで右下に赤枠で囲われたタスクがでるので画像を押す
- 赤い部分を押し、使いたいところだけトリミング
- まるでこんな感覚!

- 左側のファイルを選択して、ダウンロードから画像を選択して、右下の開くを押す
- すると追加されます
- テキストの上に画像を持ってくると中に開きます

タイピングを速くする 5つのコツ


手元を見ない	ホームポジション	正しい指使い
きれいな姿勢	ローマ字入力	speed up!

○児童向けICT活用攻略方法の目的


児童が目にする廊下の壁に掲示した。タブレットを素早く効率よく操作できるように、視覚的に分かるようにした。早速タブレットを持ってきて、廊下で掲示物を見ながら操作をしている児童がいた。「次の時間に使ってみよう」という声も聞こえた。

(4) 承諾書「可動式コンピューター使用のルール」

令和5年6月
新座市立新開小学校



可動式コンピューター使用のルール



学習内容を理解し、より豊かな学びを実現させるためには、可動式コンピューターを上手に活用することが大切です。可動式コンピューターはみなさんの学習に役立てるための道具です。便利な道具ですが、心配されることもあります。
そこで、「可動式コンピューター使用のルール」を定めました。全員が、このルールを守り、可動式コンピューターを安心・安全・快適に活用していきましょう。

1 可動式コンピューターを使う目的
学校で貸し出しをする可動式コンピューターは、家庭での学習のために使うことが目的です。ゲームや学習に関係のない動画の閲覧など、学習に関わる以外に使ってはいけません。


2 可動式コンピューターを使うときに注意すること

- 家庭以外の場所で使用しません。
- 可動式コンピューターは、カバンに入れて持ち帰ります。また、登下校中は、可動式コンピューターをカバンから出しません。
- なくしたり、ぬすまれたり、落としたり、水にぬれたりしないように十分に気をつけます。
- 可動式コンピューターを持ったまま走ったり、可動式コンピューターを地面に置いたりしません。
- 水をかけたり、湿気の多いところで使ったりしないようにします。また、日光が強く当たる場所や、ストーブの近くなどにはおきません。
- 可動式コンピューターを操作するときは、画面を指でふれるか専用のペンをつかいます。専用のペン以外でふれたり、落書きしたり、磁石を近づけたりは絶対にしません。
- 長時間続けて使いません。また、寝る時刻の30分前には、使うのをやめるようにします。

3 保管の仕方
 家の人の目の届くところに保管します。

4 安全な使用
 ルールをきちんと守ります。危険なサイトや有害なサイトに
入ってしまったときは、使用を中止し、家の人に知らせましょう。

5 カメラでの撮影
 カメラで人を撮影したり、人の家や持ち物などを撮影したりする
ときは、撮影する相手や場所の許可を必ずもらいます。



6 健康のために
 可動式コンピューターを使うときは、正しい姿勢で、画面に近付きすぎないように気をつけます。
 30分に一度は遠くを見るなど、ときどき目を休ませます。

7 個人情報など
 可動式コンピューターを他人に貸したり、使わせたりしません。
 自分や他人の個人情報(名前、住所、電話番号、メールアドレス、写真など)はインターネット上には絶対に掲載しません。
 相手を傷つけたり、いやな思いをさせたり内容を絶対に書き込みません。

8 設定の変更
 可動式コンピューターは、学校のみなどで共有して使うものなので、アイコンの並び方や位置、背景の画像、色などの設定は勝手に変えません。
 可動式コンピューターには、今入っているもの以外のアプリケーションを入れません。また、今入っているアプリケーションは削除しません。

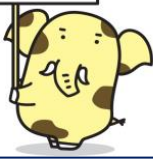
9 不具合や故障
 可動式コンピューター本体やインターネットが使えなくなって、再起動をしても元にもどらないときや、故障したり、紛失したりときは、学校に連絡をします。
 乱暴な使い方をしたり、学習に関係しないことを行って故障したり、破損してしまった場合は、修理代をおうちの人に負担していただく場合があります。大切に使います。
 充電器は17,000円程度です。クロムブック本体は、70,000円程度です。新座市教育委員会一括購入時の価格のため、個別での購入の場合、変動があります。

10 使用の制限
 『可動式コンピューター持ち帰りのルール』が守れないときは、可動式コンピューターを使うことができなくなります。
 上記の内容に承諾いたします。

切り取り線

上記の内容を承諾いただき、月日までに署名をお願いいたします。

児童名 _____
年 組 _____
保護者名 _____



ルールを守り、
「安心・安全・快適」
に活用しよう。

○承諾書導入の目的

タブレットの使用ルールを定め、学習用具であることを児童・保護者共に明確に理解してもらうため承諾書を作成。ルールを守り、正しく判断して使用できるリテラシーの向上をねらいとしている。

(6) 授業実践の記録 (掲示物として職員室前廊下に掲示)

第4学年 国語科 単元名「うなぎのなぞをおって」 授業者 佐藤 創 教諭

つかむ 【本時のめあて】
伝えたいことが伝わるフリップボードを作るために、要約カードを交流して必要な言葉や文章を選んで決めよう。

考える・深める
どんな紹介文にしようか?
あなたはどうか考える?
たくさん意見が出せましたね。

振り返る
ここから野良猫の特徴は…

シンキングツールの共有

成果
・シンキングツール「フィッシュボーン」を活用して要約カードを作成し、交流を通してよりよい紹介文にすることができていた。
・交流の中で、他の児童の意見に納得して自分の考えを変えている児童(グループ)は、深い学びにつながった。
・「自分の考えをはっきりさせるための交流である」と伝えたことにより、要点から要約へまとめるという力が高まった。

課題
・友達のアドバイスを受け自分の考えと比較したり、推敲したりする時間に十分に確保できなかった。
・オンライン参加の児童を含め全児童の評価をどのように行うかが難しかった。
・並行読書を進めていく難しさや自分の考えに根拠をもって明確に説明する技能の定着に課題が残った。

第5学年 国語科 単元名「想像力のスイッチを入れよう」 授業者 山崎 憧羽 教諭

つかむ 4つの視点の確認
課題の把握
考える・深める 個の意見
グループへ
振り返る 単元を巡じた効果的なICTの活用

“考えを広げる”とは…
考えを増やす + 考えが明確になる
考えが変わる

個々の伸びを把握するルーブリック評価
教師の適切な助言と個別グループへの個別支援
話し合う必要感
記事のこの部分から…と考えると思うけど、どう?
自己との対話による学びの実感

情報を捉える4つの視点 → 思考の見える化+共有 ⇒ 情報との関わり方の再構築 → ルーブリック評価による学びの蓄積

成果
・前時までのタブレットとノートの併用学習が効果的だった。
・個人・グループによる共有のしやすさが、学習の習熟度を高めた。
・学習の流れがスムーズに行っていた。
・児童一人一人のタブレットの活用能力が高かった。
・ルーブリック評価が簡略化されていて分かりやすかった。そのため、個々が本時のゴールを明確につかめていた。
・話し合いの仕方に関する説明と指示があり、児童が一時間の見通しをもって取り組むことができた。

課題
△話し合いが思うように活性化していなかった。
→ 活発な話し合いをさせる手立てを講じることや、意見の集約・伝達方法に工夫を持たせる必要性があった。
△活動内容によって、学習の間延びが見られた。
→ 児童が前時までの学習が定着している点から、伝え合う内容を精査し、確認程度で済ませる部分と、時間をとって議論させる部分と、活動に軽重がつくとよかった。
△評価における「考えの広がり」という視点が曖昧だった。
→ 「広がり」という視点について、教師だけでなく児童ともすり合わせる必要性があった。

第1学年 国語科 単元名「くちばし」 授業者 河辺 茜 教諭

つかむ ルーブリック評価の確認
課題の把握 前時までの学習が把握できる掲示
考える・深める 個の考え
振り返る

友達への考え
考えを広げるが得意な児童
考えたことや友達から聞いたことをどうやって問題にした方がいいだろう?

ルーブリック評価による学びの蓄積

成果
・児童が前時までの掲示やワークシートを見ながら学習していた。
・色分けがあり、見やすかった。
・ルーブリック評価が児童に分かりやすく書いてあった。そのため、本時のゴールを明確につかめていた。
・一人一人自分の気に入った動物のカラー写真が配布されていたので、学習に対する意欲付けができていた。
・クイズを作ることを単元の初めから伝えていたため、クイズを意欲的に取り組んでいた。

課題
△話し合いが思うように活性化していなかった。
→ 順序についてなのか特徴についてか話し合いのポイントを明確にするとかよかった。
話し合いのモデリングを教師が行うことで意見の伝達方法が理解できるのではないか。
△特徴を書くことができない児童がいた。
→ 真っ新なプリントだけでなく、補助的なプリントも用意して選択させるとよかった。短冊を作り、順番を考えさせてもよかった。

○授業実践の記録の目的

- ① 3年間の研究授業の記録を掲示し、どんな授業を実施したのかを、教師も児童も常に振り返ることができるようにした。
- ② 「授業の意図→展開→成果と課題」が、一目で分かる研修資料を心掛けた。

V 研究の成果と課題

1 成果

(1) ICTの活用について

- ・1年目のICTの活用を中心に行った研修が、ICTについての知識・技能の向上に繋がり、現在の授業の下地になっている。
- ・教師も児童もICTの活用が当たり前になり、ICT活用の日常化を図ることができた。
- ・シンキングツールやまとめる媒体、調べるツールの選択肢が増えたことで、課題に応じたアプローチをかけることができるようになった。
- ・対話や評価など、授業内での効率がよくなった。
- ・タブレットの活用が容易にできている。
- ・主にロイロノートを使用することで、学習活動の選択肢が増えた。アクティブ・ラーニングを進めるうえで、児童の理解状況をすぐに把握できるので時短にもなっている。

(2) アクティブ・ラーニングについて

- ・今までの授業の組み立てをより丁寧にするすることで、児童が何を学び、何を身に付けることで、どのように生かせるのか、必要感や充実感を伴って学びに向かう機会が増えた。特に、学力低位の児童にとっては型があることで安心して参加でき、特性をもつ児童にとっても個に応じた取り組み方ができた。
- ・2年目、3年目には、「アクティブ・ラーニング」や「指導と評価の一体化（ルーブリック評価）」について取り組み、教え込みの授業から児童主体の授業に変容しつつある。
- ・アクティブ・ラーニングの実態調査では図れていない段階だが、対話的活動を多く設けてきたことによって、自分の意見を発表することに対する抵抗感が少なくなっている。
- ・教師自身の授業方法を見直すきっかけになり、意図をもった話合いを児童にさせることができた。また、授業カードの活用によって、児童に主体性をもたせる授業展開が考えやすくなった。
- ・単元の導入から本時の目標に向かう意義の説明、知識として習得する場面なのか、思考を働かせる場面なのかなど、教師も児童も同じビジョンを共有して授業を展開することで、誰一人取り残さずに目標に向けてアプローチすることができ、結果的に効率よく学習活動を進めることができた。

(3) ルーブリック評価について

- ・「どこまでできれば○」という評価の判断基準を児童に示すことで、目標となる姿を想像して取り組める児童も見られるようになった。（単元のゴール含む）
- ・担任が評価を意識して授業計画を立てるため、指導の根拠や本時で児童に捉えさせたい点などが明確になり、児童にとって「理解しやすい学習」が実現できるようになった。
- ・評価内容を細分化し提示することで、児童が目標までの現在地を自覚し、個々に必要なポイントを意識して学習を進めることの一助となった。
- ・本校としてルーブリック表の型を限定しなかったことで、ルーブリック表作成の仕方を幅広く知ることができた。単元全体に対するルーブリック表や毎時間詳細に作成したルーブリック表など、手間はかかったが、指導と評価の一体化を図ることの意味をルーブリックの作成から学ぶことができた。

2 課題

(1) ICTの活用について

- ・十分活用できるがゆえに、どのタイミングでICTを活用するのかの判断基準が難しくなった。
- ・ノートとタブレットでの記入への区別を行うのが難しく、小学校段階における「字を書くことによる記述能力」の低下が心配である。(現代社会について、記述する機会は少ないが…)
- ・ノート指導がおろそかになってしまっている。字を丁寧に書く、漢字の使い方、辞書の使い方など大事な知識の定着が曖昧になってしまっている。
- ・情報モラルの面ではTPOに応じた活用方法を、全校で共通認識する必要があるように思う。
- ・タイピング検定を生かし、もっと児童のタイピングスキルを向上できるのではないかと感じる。

(2) アクティブ・ラーニングについて

- ・アクティブ・ラーニングの学習形態が定着しつつある一方、学習内容に応じた学習形態の変化が難しくなっている側面がある。対話的活動を通して、教師からの学びに偏る傾向があり、児童同士での学び合い・深め合いの場面を、今後も模索していかなければならない。
- ・授業に積極的に参加する児童をもっと増やす必要がある。
- ・対話とICTの両立が難しい。
- ・発達段階を考慮したアクティブ・ラーニングの実施を考えていく必要がある。本校の実態としても、低学年から中学年は、学力の定着、授業中の態度など、基礎的基本的なことを着実に教え込み、定着した段階からアクティブ・ラーニングを仕掛けていくと、もっと学びが深まるのではないか。
- ・一斉授業での教師と児童の一問一答のような授業ではなく、アクティブ・ラーニングで児童を動かす協同的な学びの必要性や大切さは学べた。しかし、学び合いの質と量を向上させ、児童も教師も共に実感の得られる学び合いまでは、到達できていない。

(3) ルーブリック評価について

- ・指導者の先生から、「学校において指導における評価規準（例えば、『このノートはA・このノートはB』という教職員全員の一致）が学校で統一されているとよい。」と指導をいただいた。
- ・ルーブリック評価の作成は「学習指導要領に準ずる」と考えると、低学年になればなるだけ、作成や提示、児童へ理解させることが難しい。また、その労力に応じた学習の習熟や基礎学力の底上げにつながるかが不透明である。
- ・ルーブリック評価に対しての自己評価や振り返りの内容を、さらに共通の認識を図り、系統的に整備できると、目標のために「〇〇をがんばろう」という意識を高めることができる。
- ・ルーブリック評価についての授業実践を続け、実践事例を集めていくことで、さらに児童も教師も評価意識を高めていくことが可能である。
- ・ルーブリック評価の作り方が難しく、特にA評価の作り方は難易度が高かった。
- ・児童も分かることばに置き換えるときに、本来の評価内容とずれてしまう可能性があった。

3 3年間の成果と課題のまとめ

「ICTとは」という段階から始まった本校の研究であった。この3年の間に、分散登校によるオンライン授業の実施や新型コロナウイルスによる感染不安から、複数の家庭と学校を繋ぐハイフレックス授業の実施など、タブレット端末があることで乗り越えられた場面が多く存在した。まず

は、教師と児童を繋ぐことを優先として使用してきたタブレット端末であるが、現在はそれを学習の道具の一つとして、有効に活用することができている。

本校の研究主題「主体的・対話的で深い学びの創造～ICTを活用した授業実践を通して～」のうち、副主題のICTの活用に関しては、0からスタートした研究としては、現段階として一定の段階に到達できたと実感している。その結果が、新座市内で活用率の高い学校の一つであるという数値（新座市ロイロノート活用状況調べ・令和5年6月）に表れていると素直に捉えている。

一方で、一斉授業から脱却した授業改善を図り、主題に迫るために取り入れた「アクティブ・ラーニング」については、まだまだ改善の余地が残っている。これまで「対話的な活動」に焦点を絞りながら、学ぶ必要感のある授業、必然的な対話を生むための手立てなどを打ち出し、児童を積極的に動かしながら思考を活発にさせ、学び合いの中で学力の定着や共感的な人間関係の構築、メタ認知力の向上などを目指してきた。さらに、児童に学びを委ね、広げた学習をきちんと集約させるためにルーブリック評価を導入し、「活動あって学びなし」に陥らない、「指導と評価の一体化」を図る手立てを考えた。

しかし、「アクティブ・ラーニングに関する実態調査」や「国語に関するアンケート調査」においては、数値上での相関関係や有効な結果を得ることはできず、本校の目指す児童像に至る明確な伸びを確認することができなかった。

要因の1つ目として、児童の発達段階や一人一人の実態に、アクティブ・ラーニングの学びを合わせ切れなかったことが挙げられる。先の課題でも記したが、基礎的・基本的な知識・技能、考え方や対話の仕方などを児童に教え込んでいく段階、少しずつ手を放し児童に委ねていく段階と、アクティブ・ラーニングの学習形態を実践していく上でも、発達段階を踏まえた、系統的な授業を創り上げていかなければならなかった。

2つ目の要因として、「対話的な活動」において、必然性のある対話、対話する意味をもっと追求していかなければならなかった。つまり、対話による「考えの変容」「深まり」を導き出すことが甘く、児童に主体性を生むことができて、学びを児童に深化統合させていくことが難しかった。

現在の学習指導要領が求めている「主体的・対話的で深い学び」に正面から挑んだ研究において、望んだ結果は得られなかったが、現在求められている教育を鑑みると、アクティブ・ラーニングは必要不可欠な学習形態であることは、十分に理解できた。今後も、本校の児童に基礎的・基本的な学習の定着を図りながら、対話の質を向上させ、学び合いの中で児童を育む努力を続けていく。

【参考文献】

- ・吉田新一郎訳 たった一つを変えるだけ 新評論 2015年
- ・西岡加名恵著 資質・能力を育てるパフォーマンス評価 明治図書 2016年
- ・田中博之著 アクティブ・ラーニング実践の手引き 教育開発研究所 2016年
- ・田中博之著 アクティブ・ラーニング「深い学び」実践の手引き 教育開発研究所 2017年
- ・奈須正裕著 「資質・能力」と学びのメカニズム 東洋館出版社 2017年
- ・西岡加名恵・石井英真著 教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価 日本標準 2019年
- ・大木浩士著 博報堂流対話型授業のつくり方 東洋出版社 2020年
- ・イーディーエル株式会社 今すぐ使える! Google for Education 技術評論社 2020年
- ・教育科学研究会「教室と授業を語る」分科会 コロナ時代の教師のじごと 旬報社 2020年
- ・田中博之著 「主体的・対話的で深い学び」学習評価の手引き 教育開発研究所 2020年
- ・坂本旬・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・林一真著 デジタル・シティズンシップ 大月書店 2020年
- ・田中博之著 実践事例でわかる! タブレット活用授業 学陽書房 2021年
- ・今宮信吾・田中博之著 「NEW学級力プロジェクト 小中学校のクラスが変わる 学級力プロット図誕生!」 2021年
- ・石井順治著 続「対話的学び」をつくる ぎょうせい 2021年
- ・山崎垂矢・大橋康一・吉田新一郎訳 質問・発問をハックする 新評論 2021年
- ・実践事例でわかる! アクティブ・ラーニングの学習評価 学陽書房
- ・堀 裕嗣著 AL授業10の原理・100の原則 明治図書 2023年
- ・山本茂喜著 思考ツール×物語論で国語の授業デザイン 東洋館出版社 2022年

【御指導いただいた先生】

十文字学園女子大学副学長 社会情報デザイン学部教授（令和3・4・5年度）	安達 一寿 様
新座市教育委員会学校教育支援課 指導主事（令和5年度）	佐久間 雄一 様
新座市立片山小学校 校長（令和5年度）	戸高 正弘 様

【研究に携わった教職員】

【令和3年度】 ☆研究推進委員長 ○研究推進委員

校長 影山 葉子 教頭 高 徹二 教務主任 栗原 克彦

○伊藤 友美 ○環 香奈恵 ○坂田 理恵 室井 薫平 鈴木クリスティーン
 三浦 琴弓 佐藤 創 淀野 一成 濱本 雅之 恩田 ゆり
 稲葉祐紀子 山崎 憧羽 佐々木 慧 大竹 家治 村田 聖子
 ☆富岡 翔悟 ○朝見 史子 ○澁谷 初枝 柳世 梢
 滝島 聖也 ○村上 辰徳 島 仁美 占部 理恵
 駒崎 晃司 前原 和美

【令和4年度】 ☆研究推進委員長 ◎副研究推進委員長 ○研究推進委員

校長 影山 葉子 教頭 本田 真智子 教務主任 栗原 克彦

○坂田 理恵 ○朝見 史子 神崎 凌 島 仁美 鈴木クリスティーン
 隈部 智子 室井 薫平 ○村上 辰徳 福富ニールまどか 恩田 ゆり
 佐藤 創 ◎淀野 一成 滝島 聖也 大竹 家治 村田 聖子
 ○環 香奈恵 阿部 咲希 土屋 圭汰 柳世 梢
 河辺 茜 ☆富岡 翔悟 ○細川 佐和 吉田 由美
 深川 亮介 山崎 憧羽

【令和5年度】 ☆研究推進委員長 ◎副研究推進委員長 ○研究推進委員

校長 影山 葉子 教頭 本田 真智子 主幹教諭 山崎 哲也

○環 香奈恵 ☆富岡 翔悟 ○坂田 理恵 土屋 圭汰 福富ニールまどか
 河辺 茜 坂口 凌 金澤 毅 ○細川 佐和 鈴木クリスティーン
 ○深川 亮介 吉田 雪乃 ○朝見 史子 島 仁美 柳世 梢
 鮎川 唯 ◎淀野 一成 阿部 咲希 米井 結花 大山 順子
 山崎 憧羽 滝島 聖也 神崎 凌 金子 笑美 村田 聖子
 藤井 理恵 恩田 ゆり

おわりに

本校では、令和3・4・5年度の3年間、新座市教育委員会の委嘱を受け、研究テーマ及びサブテーマを「主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～」と設定し、実践研究に取り組んで参りました。

「主体的・対話的で深い学びの創造」「ICT活用」という大きな研究テーマであるため、研究の方向性や授業の進め方に戸惑うこともありましたが、研究授業をもとに協議を重ね、指導者の先生方に御指導をいただきながら、少しずつ研究の成果が見え始めてきたところです。今後も、これまでの研究を継続していくとともに長期的な視点で「主体的・対話的で深い学びの創造」に努めて参ります。

最後になりましたが、本校の研究を推進するにあたり、3年間に渡って私たち教職員一人一人にきめ細かい御指導をいただきました十文字学園女子大学副学長 安達 一寿 様、今年度から御指導賜りました新座市教育委員会学校教育支援課指導主事 佐久間 雄一 様、並びに新座市立片山小学校長 戸高 正弘 様に心より感謝申し上げます。さらに、今回本校にこのような素晴らしい研究の機会を与えてくださり、御指導いただきました新座市教育委員会教育長 金子 廣志 様をはじめ新座市教育委員会の皆様方にお礼申し上げます。結びといたします。 教頭 本田 真智子